雪のお姫様

トモカナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪のお姫様

【Ｎコード】
Ｎ３０８８Ｓ

【作者名】
トモカナ

【あらすじ】
何故か男に好かれやすい特異体質を持つ、女の子大好きな普通の男子高校生、相沢由貴。その由貴の前に現れた謎の少女が、由貴に向けて言ってくる。「わたしの『純潔』を返して！」と。……純潔なんて、奪った覚えはないんですが？

プロローグ

相沢由貴(あいざわよしたか)の黒歴史。

その一。

幼稚園の頃、公園で遊んだ帰り道、突然知らないおじさんに誘拐された。さらわれそうになった由貴を、母親が死に物狂いで守り抜いてくれた。半殺しにされたおじさんの弁。

『あまりにも可愛らしくて、ついついやって――ぐぼへぁっ』

その二。

小学校三年生の時、仲良しだった近所のお兄さんに押し倒される。半裸に剥かれて泣いているところを、やはり母親に助けられる。半殺しにされたお兄さんの弁。

『だって誘惑してきたのは、由貴君だ――ほげぇっ』

その三。

中学校一年生の時、美術の男性教師に迫られまくる。

美術準備室へ呼び出しを受けて、やはり押し倒された。この頃には母親抜きで自分を守る術を身につけていた。泣きながら脱兎の如く逃げ出して。しかしその後も何かとその教師に絡まれ続け続け三年間。由貴の名前は全校生徒、知らない人間はいないほどの有名人に。最低な中学生活となった。

その四。

電車通学で一時間を要するとしても、相沢由貴の噂を誰一人として知らない新天地への希望を胸に、星乃城(ほしのしろ)学園へ入学。

とりあえず一から青春のやり直しをする為に、持ち前の運動能力を生かせるだろう陸上部へ入部した。これが失敗だった。

春爛漫、うららかなある日のこと。
生徒会長という肩書きを持つ学園一のイケメン、ファンクラブまで存在する有名人に、部室で押し倒される。
新たな黒歴史に項目が付け足されたと同時。他の陸上部員に目撃されてしまったことから、相沢由貴の名前はまたも学園内に知れ渡ってしまう。女子からは好奇と嫉妬の眼差し、男子からは憐憫と敬遠（＋恋慕）の眼差しを向けられる毎日になってしまった。
もちろん、由貴はまごうことなき生粋の、男子である。
女の子みたいな可愛らしい容姿を持ち合わせているわけでもない。それなりの顔立ち、標準体型。成績は落ちこぼれ、運動だけは得意だけれど、特に突出するところがない平凡で平均的な高校一年生だ、というのに。
由貴について、誰しも同じ言葉を口にする。

『相沢由貴は、男に好かれやすい』

高校生になってもついてまわる自分の特殊能力？　に、由貴はいい加減うんざりしていた。
いっそ登校拒否児になってしまいたい、と思いながらも小心者な由貴は将来を案じて内申に響く行動を起こせない。
そうして毎日憂鬱な気持ちを抱えて、学園の門を潜るのだ。
そんな由貴が声を大にして言いたいことが一つある。
たまにストレス解消に、自室の窓を開け放ち絶叫してみる。
聞きつけた母親に、折り曲げた雑誌で思い切り後頭部を殴られるのがオチだ。

本日もまた、日常通りに生徒会長に付きまとわれた。
隣のクラスの男子に告白された。
女子に「男のくせにふざけんな」とか陰口叩かれた。

……程よく鬱憤を溜めて、我が家に帰宅。自室に入って由貴は息をつく。
窓を開け放つと、梅雨の時期特有のむんむんとした湿気が部屋へと流れ込んできた。
見上げる空は雨こそ降っていないが、灰色の厚い雲に空一面が覆われていて、今にも降り出しそうだ。
由貴の心を表しているようなくすんだ空に向かって、
肺いっぱいに息を吸いこみ、
「俺は女の子が大好きだぁああ！！」
絶叫した。
――直後。ものすごい勢いで階段を駆け上がってくる音がし、自室の扉を開け放たれた。
「恥ずかしいこと叫ぶなって何回言えば分かるの！」
後頭部に衝撃。首がものすごい振り子運動をした。由貴は恨みがましい眼で振り返る。
そこには予想通り母親が分厚い雑誌を手に、仁王立ちして由貴を睨んでいた。
凶暴かつ頼もしく由貴をここまで育ててくれた、母親だ。
「……女の子が好きなのは恥ずかしいことじゃないやい」
由貴は唇をとがらせ、ぼそりと口答えする。
「そういうのは、心の中に閉まっておきなさい！　近所の人にどういう育て方してきたのって囁かれるのは母さんなのよ」

「ハッ、近所なんて好きに言わせておけばいいんだ。母さんは普通に恋愛して普通に結婚できたから、俺の気持ちを理解できないんだ。俺のように夢も希望もない人生を歩んでみたら叫んでみたくもなるさ」

「高校一年生が何人生語ってるのよ。まぁ確かにアンタは昔から妙に男に襲われる体質ではあったけどねぇ。今からきっと女の子との出会いも増えてくるわよ」

少し同情的になったのか、母親が厳しい表情を緩めてフォローをしてくる。しかし由貴は半眼で母親を見つめたままだ。

「そんな気休めなんていらない。今すぐ彼女が欲しい。彼女をくれ」

「男に好かれすぎる反動なのかしら……アンタ、女の子女の子って昔から可愛い女の子ばっかり追いかけてるんだから。ちょっとは違うことに情熱を注げないの？」

「女の子は夢だ。希望だ。青春なんだ」

「小さい頃みたいに可愛い女の子のお尻ばっかり追いかけて、キスしまくってないでしょうね」

今度は母親の方に半眼で睨まれた。

「そ、そ、そんな相手が現実にいたら俺は青春を捧げるぜ……！女の子～可愛い女の子はいねぇがあ～」

由貴は窓の方に向き直り、虚しく言い放つ。

母親が完全にいってしまっている由貴を見て諦めたのか、はたま

た気色悪くなったのか、退散していった。
扉が閉められるのを背後に感じる。

「彼女、降ってこないかなー」

今度は怒られないように、小さく呟いた。
もちろん簡単に女の子など空から降ってくるわけがない。
代わりに灰色の空から、雨がぽつぽつと降り出した。
この雨が終われば、もうすぐ夏がやってくる。

第一話　夏のはじまり？

信じられないことが起きた。
常識の範囲内ではあるのだが、由貴にとっては天変地異に等しい出来事が。
朝から初夏の熱気で汗ばみ、身体にぺっとりとシャツが纏わり付く。由貴はあまりいい気分じゃない状態で、星乃城学園に登校してきた。ただでさえ毎日いいことなんてありやしないのだ。死んだような眼のまま、玄関でいつものように履いてきたスニーカーを下駄箱にしまう。自分の名前の札がついている小さな扉を開ける。憂鬱な学園生活一日のはじまりの光景だ。
入っているのはスリッパだけの筈、だった。
けれど今日は違った。
見慣れないものが入っていて、由貴は一瞬固まった。
一瞬どころか、一分程固まっていた。
正気を取り戻した頃に、遅れて激しい動悸に襲われる。
これはなんだ……！？
もしかしてもしかすると、世間一般ではよく聞く、けれど自分には全く縁がなかったものじゃなかろうか……！？
由貴は下駄箱のスリッパの上に置かれた封筒に、恐る恐る、手を伸ばす。
自分の手元まで引き寄せ、それを確認した。
由貴の身体に電流が駆け抜けた。
淡い水色の封筒。表面に可愛らしい文字で、
『女の子からのラブレター』
と書かれている。
凄まじく直接的だった。裏面を素早く確認。『相沢由貴様へ』と

書いてある。

「ラッラッラぶ……」

「ゆきたん何言ってんの？」

唐突に背後から声をかけられ、由貴はびくん！　と肩を揺らす。

慌てて学生服の胸ポケットの中に、その封筒を押し入れた。

激しく高鳴った鼓動のままで振り返る。と、同じクラスの泉田春香（いずみだはるか）が立っていた。

出席番号が近いからか、彼女は何かと由貴に声をかけてくれる珍しい女子だ。はじめて会った頃から、彼女は何故か由貴を「ゆきたん」と呼んでくる。

泉田春香は茶色がかった波打つ髪を、胸の上あたりまで伸ばしている。由貴をきょとんと見上げる、けだるそうな印象を受けるたれ目。何よりも由貴が彼女と遭遇する度に注目してしまうのは、標準を軽く上回るであろう胸。彼女の武器と言ってもよかった。入学当初から男どもの注目を集めている美少女だ。

由貴は朝から春香に声をかけられると、いつもはラッキー！　と心の中で踊ったりするのだが、今日は事情が違う。心臓がヒヤリ、とした。

「ラッラッラッて何？　歌？」

「歌というかですね、ええとら、ら、ランドセルが懐かしいなぁなんて！」

「ランドセルの歌かぁ。ところでゆきたん、夏休みってなんか予定ある？」

ドキリ、としてしまう。いつもののんびりした口調なので深い意味はないだろうけど。ないだろうけど！
由貴はぶんぶんと、強く首を振る。
「帰宅部だし！　なんの予定もありませんぜ！」
ニカリと歯を見せ、力強く言ってみた。
春香がにっこりと微笑みを向けてくる。殺人的魅力を放つスマイルに、由貴はこれ以上ないくらいに鼓動を高鳴らせた。
「そっかぁ。もうすぐ夏休みだし、楽しみだねぇ」
そう言って。春香は由貴に手を振って、去っていく。
「え？　そんだけ？」
何かフラグでも立ったのか、と期待に胸を躍らせていたというのに。春香はあっさりと姿を消す。
……しばらく、立ち尽くす。
そして正気に返った。胸ポケットに慌てて仕舞った手紙の存在を思い出したのだ。
「俺にはまだこのフラグが残っているのさあぁあああ！！」
絶叫し、由貴はものすごい勢いで階段を駆け上った。
自分の学年、三階にあるトイレの中へと突撃。傍から見ればものすごく我慢していた人間のように見えただろう。
トイレの個室の中へと入り、後ろ手にしっかりと鍵を閉めた。
便座の蓋を閉め、その上に座ってようやく一息つく。玄関からトイレの個室に至るまで、ほぼ呼吸をしていなかった。

ポケットの中から、隠していた封筒を取り出す。

『相沢由貴様へ』

間違いなく、自分の名前。

「これは間違うことなき女の子からのラブレター！　おおお！　なんと、なんと神々しい！！」

由貴の目に映るその封筒は輝いていた。後光が差していた。眩しくて目を細める。感動でちょっと瞳が潤んだ。

ぷるぷると震える手で、糊付けされた封筒を丁寧に剥がしていく。一生こんな素晴らしい代物にはお目にかかれないかもしれない。家宝として末代まで保存しなければならないので、びりびりと破ることなど言語道断なのだ。

封筒の中から一枚の便箋が出てきた。

雪の結晶が描かれた、いかにも女の子らしい便箋。由貴は鼻息を荒くする。

「なになに」

相沢由貴様へ。

話がある。

今日のお昼休みに図書室に来い。

周防吹雪（すおうふぶき）より。

由貴は可愛げのない文章に若干拍子抜けしたものの、直後更なる高揚感に襲われた。

「お話ってもしかしてもしかしなくてもあれですか！？」

完全に危ない人になりながら、由貴は小さな声で呟き続ける。

「おおお俺的には全然オッケーですぜ。会ったことはないけど俺、もう君に恋しちゃってるし。ストライクゾーン広いから！　どんな容姿だろうとどんな年齢だろうと妖怪だろうと幽霊だろうとロボットだろうと美少女戦士だろうと何でもこい！　男じゃなければなんでもいい！」

言ってから、はっとする。

正直、男には何度もラブレターを受け取った経験がある。

もう一度封筒と便箋を確かめる。裏返してみたり、封筒の中をもう一度探ってみる。今回の手紙からは女の子臭しかしない。実際『女の子からのラブレター』と書いてあるじゃないか。由貴は女の子を嗅ぎわける能力だけは、超越していた。

「待っててね、周防吹雪ちゃん」

瞳をきらきらと輝かせ、由貴は言い放った。

＊＊＊

その日の由貴は、うわの空で授業をやり過ごした。

制服の内ポケットに入れた手紙を何度も服の上から確認しては、口元を緩ませる。

普段からクラスメイトに敬遠されがちだったが、いつにも増して異様な空気を放つ由貴「ふへへへへへ」――完全に距離をあけられていた。由貴自身は周囲の白い眼差しに気付くことなく、この上なく

幸せそうだ。
午前中の授業を終え、待ち望んだ昼休みに突入した。
生徒たちは散り散りになり、学食に食べに行ったり、購買へパンを買いに行ったり、持参してきたお弁当を出してその場で広げるなど様々だ。
由貴はソワソワと立ち上がる。
その時になって佐々木陽太（ささきようた）が椅子を引っ張ってきて、由貴の前に座った。
佐々木陽太は星乃城学園に入学してから出来た、由貴の数少ない友人である。
由貴は今までの経験から、男に対して異常な警戒心を働かせる。自分からは絶対近寄らない。しかし陽太からは、全く怪しい雰囲気を嗅ぎ取ることはなかった。誰に対しても分け隔たりなく接する人物なので、安心して友人になることができた。
陽太は顔立ちから知的なイメージを感じさせる、クールな男子だ。委員長タイプなしっかりものの性格が受けているのか、意外に女子からもてている。由貴にとっては羨ましい限りの人物だ。しかしそのことを鼻にかけている風ではない。きちんと彼女がいることを広言しているし、その彼女一筋なのだと聞いている。たまに死ねばいいのにとか思わないでもない。
「なんだ由貴、飯食べないのか？」
陽太とは自然と毎日昼食を共にする間柄となっている。
「俺は今日、運命が変わる特別な用事があるんだ！　よって飯を食べている場合ではない！」
「ふーん」

陽太は由貴のテンションを完全にスルーして、持ち寄ってきた弁当を由貴の机の上に置いてきた。かわいいうさぎさんの絵がついた弁当巾着。彼女に毎朝渡されているのだとか。毎日毎日彼女の手作り弁当……死ねばいいのに死ねばい「今日から俺はこんな腐った思考とはおさらばだぜ」

由貴は陽太に向け、爽やかに言い放った。

「見てろよ、陽太！」

ビシリと人差し指を向けた。

「そうかそうか」

陽太は顔も上げず、弁当を食べている。軽く受け流され、由貴は鼻息を荒くした。

「もう相沢由貴は男好きなんて言わせない！」

「てか俺はそんな風に言ったことないし」

「それもそうだな」

由貴はあっさりと頷く。こんなところで陽太と遊んでいる場合ではないのだ。目指すは図書室……

「うわあぁああ！」

由貴は驚愕の表情を浮かべ、唐突に叫び声をあげた。

「お前、絶叫癖をやめろと何度言えば」

近くで絶叫の洗礼を浴びた陽太が、険しい表情を作って見上げてくる。

「俺、図書室の場所を知らないじゃないか！」

陽太の苦言も耳に届かない。由貴は凄まじく深刻な表情で、言い放った。

「図書室？　なんで突然図書室？」

事情を知らない陽太は首を傾げているが、由貴はそれどころではない。夢中で陽太の両肩をがばっと掴んだ。

一部の女子から「きゃー！」と黄色い声があがる。由貴の動向をいつも観察している腐女子グループたちだ。その黄色い声を聞く度、由貴の心には黒雲がたちこめ、暗鬱とするのだが、今は気にしている余裕はない。

「陽太！　図書室の場所を教えてくれ！　頼む！」

「……ま、お前にとって重要なことなんだな。事情は知らんけど」

陽太は立ち上がって自分の机まで行き、ノートとペンケースを持って戻ってきた。

再び椅子に座ってノートの端に地図を書いてくれる。

「本館の校舎がここだろ。少し歩くと丘がある。坂道を登った先に別館があるんだ。小さい建物だからすぐ分かる。その二階部分が図書室になってる」

「へえ。別館なんて知らなかった。入学したばっかなのに詳しいな」

「本くらい読めよ」

陽太からの突っ込みを受けて、由貴は思い出した。そういえば陽太は時間が余っていると、よく本を読んでいる。なるほど図書室を利用していたのか。小さい頃から全く本を読んでこなかった由貴にとっては、未知の領域である。

「とにかく助かった！　じゃあな陽太！」

今から俺は大人の階段を駆け上ってくるぜ！　と陽太に向けて瞳を輝かせ、親指を突き出して格好良く笑顔を見せてから。

全速力で図書室へと向かって、走り出した。

陽太に教えられた通り、校舎を出て別館を探す。

星乃城学園の敷地はとてつもなく広い。由貴は未開であった丘の上へと踏み込んでいく。緩やかな坂道を登って行くと、別館らしき建物を発見した。

建物の周囲は鬱蒼と木々が並び、森のように茂っている。別館だけがこの学園内で異世界のような雰囲気を放っている。

入りづらいな……由貴はたじろいだ。

人気も全くない。昼休みには開放されていないのだろうか。

由貴はしかし気合を入れなおし、別館の中へと入っていった。開いていたのでほっと息を吐く。

踏み込んでいくと、一階は幾つかの部屋に分かれていた。備品室、茶室などの札が下がっていることから本館に入りきらなかった予備の部屋のようなものだろう。そしてらせん状になった階段を上がっていく。二階部分が全て図書室になっていた。

カウンターに人が座っていることに気付いた。それにしても広い。

本棚にはたくさんの本が並んでいる。紙の匂いが充満する独特な空間。由貴には全く興味のない分野だったので、ますます落ち着かない。

由貴がカウンターの前をおずおず通ると、座って本を読んでいた女性が顔を上げたのが視界の端に映った。

「こんにちは」

挨拶をしてきた人物に、由貴は愛想笑いを浮かべつつ顔を向け――「わぁっ」と間抜けな声で返してしまった。

眼鏡をかけた若い女性だった。肩のあたりまでのばした艶のある黒髪を、耳の横で一つに束ねている。一つ一つのパーツは目立つものではないが、全体で見るとバランスが完璧に整った顔立ちだ。とてつもなく美しい。由貴は見惚れてしまう。

学園内にこんな美人さんが隠れていたとは。陽太め。と陽太に恨み節を吐きながら、更に中へと入っていく。

図書室の中は、その美人さん以外には誰も見当たらなかった。

本棚の陰になっている場所まで回りこんでみたが、待ち人はいない。

もしや、あの美人さんが俺に手紙を……？

遠くから美人さんを盗み見ながら、期待に胸を躍らせていた時。

――すとん、と。

由貴の眼前に、何かが落下して、床へと突き刺さった。

「……え？」

それは、由貴の身長の半分はあるだろう、巨大な氷柱（つらら）。

図書室に存在しうるはずがないものを目にし、由貴は硬直する。

頭の中が真っ白になる。

更に、すとん、すとん。

由貴のすぐ右横。氷柱が床に突き刺さった。普通に目にする氷柱よりも巨大で鋭利なソレ。刺さったら……死ぬ？
ぞぞぉっと背中に悪寒が走り抜けた。
由貴は嫌な予感に冷や汗を額に浮かべ、恐る恐る天井を見上げ、

「う、嘘だろおおおおっ！？」

天井一面に、氷柱が張り巡らされていた。
完全にパニック状態に陥る。動くことすらままならず。
氷柱が降ってくる。由貴の眼前へと迫る。
唐突に死を見た。由貴の脳内に走馬灯のように駆け巡るのは、男に襲われた黒歴史の数々ばかり……

「そんな走馬灯嫌ぁあああ！！」

ただ絶叫し、由貴はぎゅっと目を瞑った。
衝撃は上からではなく、横からやってきた。
――何かが勢いよく、ドカッとぶつかってきた。

「ぐわっ！？」

由貴は図書室の床にべちゃりと転がる。
事態が把握できないまま、腕を強引に掴まれ、引っ張られた。

「こっちへ！」

女の子の声。ようやく目を開ける。
小柄な女の子の背中が見えた。腰まである長いストレートの黒髪が、揺れていた。由貴は腕を掴まれ、凄まじい勢いで引っ張られている。足をもつれさせながら連れられて、氷柱の降り注ぐ図書室を

走り抜けた。
らせん階段を転がるように降りていく。一気に別館を脱出した。
「はぁ、はぁ、はぁ……！」
少しの距離を走っただけなのだが、息が切れ切れになっている。
心臓が激しく脈打ち、口から飛び出しそうだ。由貴は女の子から手を離されて、膝を折り曲げ荒い息を吐き出す。
あまりの出来事に、混乱が極まって言葉も出てこない。
顔を上げ、助け出してくれたであろう女の子を確認しようとし――
「うわぁっ」
女の子らしき塊にタックルをかまされ、由貴は地面に倒される。
そのまま由貴の腹の上に馬乗りになった女の子が、由貴を程近くで見下ろしてきた。
「な、ななななぬ」
女の子に押し倒された経験などない由貴には、冷静な状況把握など不可能で。地面に打ち付けた後頭部が痛むことと、蝉の鳴き声だけがその場で理解できることだった。
きらめく大きな瞳が、由貴を見ている。じぃっと。真剣な眼差しで。
「相沢由貴！」
名前を呼ばれた。口がカラカラに渇いている。返事も出来ない。
「わたしの……わたしの純潔を、今すぐ返して！」

女の子が、叫んだ。それはもう切実に、必死な表情で。

「じゅ、純潔だあああっ！？」

思わず由貴も叫び返してしまっていた。

「純潔って、純潔って！　お、俺がいつキミを穢すようなマネを！？」

ついさっき会ったばかりですよね。

どうやら由貴のことを氷柱地獄から連れ出してくれた命の恩人らしい女の子を、由貴はようやくじっくりと観察した。

小柄で華奢な体格。きっちりと揃えられた長く艶やかな黒髪。そして夏にそぐわない、真っ白な着物姿。時代錯誤を感じる。着物は何故か嵐を抜けてきたかのようにボロボロで、女の子自身も汚れ果てている。

凛とした眉に大きい瞳、幼いながらに顔の造りは整っているけれど……由貴は思わず首を傾げた。

その女の子を見ても、由貴の鼓動は全く高まらないのだ。

……なんというか、その子からは全く女の子の魅力というものが感じられなかった。

女の子大好きを自負する由貴が、ここまで萌えない女子と会ったのは初めてかもしれない。

そして、女の子は何故か苦しそうに表情を歪めていた。

「死にたくなかったら返しなさい！　早く！　今すぐ！」

切迫した様子の女の子がぐいぐいと迫ってくる。

この状況がとてつもなく純潔とかけ離れている気がするのだが、

必死な女の子は気付いていないらしい。

「キミがもしかして周防吹雪なのか？」

女の子ははぁはぁと苦しげながら、頷いてきた。色白の頬が真っ赤に染まっている。照れているのではなく、苦しそうであり、怒っている様子だ。

「じゃあ手紙にあった、話があるって……その、純潔云々ってこと？」

「覚えてないのね、わたしの純潔を奪ったこと」

由貴を見つめる瞳に浮かんでいるのは、限りない怒りの感情。確信した。

彼女は由貴を手紙で呼び出した張本人、周防吹雪であり。由貴を愛の告白で図書室に呼び出したのでは、決してないということ。

図書室に来るまでの浮き足立った気分が、萎えていく。

「はぁ……」

なんという空回り。由貴はため息を漏らした。

しかし……問題は、周防吹雪がなんの為に由貴をここに呼び出したのだ、ということだ。名指しで呼び出されたということは、彼女は自分を知っている。覚えてないのね、と怒っているくらいなので、彼女に対して自分が何かをやらかしたのだろうが、全く身に覚えがない。純潔？　冗談じゃない。たとえ女の子が好きでも、罪を犯すようなマネだけは決してしてこなかったと胸を張って言える。

もう一度上から下まで周防吹雪を観察してみたが、やはり全く見覚えのない女の子だった。

「……あのさ、もしかして人違いとかじゃない？　俺はキミの純潔なんて奪った覚えないし。しかも返せと言われて、返せるものなのか？」

由貴は明らかに怒っている吹雪に対し、なるだけ穏便に語りかけてみた。

「人違いなわけない！　会った瞬間に分かった！」

「そう言われても」

「しらばっくれるのね」

吹雪が強い瞳で由貴を睨みつけてくる。由貴はその強い眼差しにたじろぐばかりだ。

襟ぐりを掴まれて、更に顔が近付いてくる。息がかかる程の至近距離。

「返して」

吹雪が由貴に乗っかったまま、言い放つ。

恥ずかしい体勢なのだが、周りが見えていないらしい吹雪はただ必死に由貴を見つめ、訴え続けてくる。

吹雪の瞳を至近距離で見て、気付いた。目が潤んでいる。今にも泣きそうな程に。

彼女にとってそれほどに深刻な事柄なのだろうか。

「うー……でも全く知らんし」

唐突に、吹雪がへたり、と由貴の胸の上に倒れこんできた。荒い息で肩が上下している。

「お、おい、大丈夫なのか？」

吹雪の様子はどう見ても普通ではない。由貴は密着した吹雪のぺったんこな胸にがっかりしつつも、周囲に視線を巡らす。

「誰かに助けを……」

「必要、ない」

吹雪が切れ切れに紡ぎ、フラフラの状態で立ち上がった。

「あ、おい」

ずるずると身体を引きずりながらその場を去ろうとしている吹雪に、由貴もさすがに心配になって背中に声をかける。

吹雪が振り向いてきた。

「わたしは純潔を奪ったあなたを、許さないから」

感情を込めて、言われた。由貴はそれ以上声をかけることも、追いかけることもできずに立ち尽くす。

「俺……完全に悪者扱い？」

ぽつり、と呟いたと同時。

昼休み終了の鐘が、学園内に鳴り響いた。由貴は現実に返り、校舎へと急いだ。

校舎に向かう途中、赤い髪の毛が目立つ女の子とすれ違った。
すれ違う瞬間、女の子が口を開いた。
「キミは悪者ですよ。死ねばいいのに」
耳に届いた穏やかでないセリフに、由貴はぎょっとして女の子を振り返る。
赤髪の女の子は、その場から消えうせていた。
「……なんか変な日だな」
由貴は首を捻りながら、走るのを再開させる。
強い日差しに目を細め、蝉の鳴く声が耳に届く。
夏が、はじまった。

第一話　夏のはじまり？

生まれ変わる予定だった由貴は、全く変化がないまま教室に戻ってきて、自分の席へと腰かけていた。
開け放たれた窓からは湿気を帯びた生温い風が入ってくる。まだ初夏だというのに、今年は暑くなりそうだ。
机に頬杖をつき、先ほどの非現実な出来事を思い返してみる。
謎の少女、周防吹雪との出会い、言葉は謎だらけだった。それに図書室での突然の命の危機。しかし由貴は深く考えるのが苦手であった。きっと白昼夢でも見てしまったのだ。周防吹雪との邂逅はなかったことにしよう、うん。簡単に結論はついた。
しかし手紙には悔いが残る。念願の彼女ができる筈だったのに。
由貴は吹雪が呼び出した理由が愛の告白だったらと想定してみた。

『あなたのことが好きなの！』

なんて、小さな女の子が自分に向き合って言ってきたとしたら。
舞い上がった気持ちのまま、受け入れたのだろうか。
由貴は吹雪を初めて見た時、全く胸がときめかなかった。同じ年頃の、しかも可愛い女の子だったというのに。……もしかして俺、おかしくなっちゃったのかな。
心配になりつつ、先ほど同じく初対面だった図書室の美人さんには思い切り胸をときめかしていたことを思い出す。

「ふへへ」

顔がニヤけてしまった。右隣の女子が、可哀相な人を見る目を向けてきた。
吹雪は多分好みじゃなかったのだろう。ということにしておいた。

女の子だったらなんでもいいやって思っていた俺にも好みがあったんだあ、なんてしみじみしていた時。
授業開始の鐘が鳴った。
スライド式のドアがガラリと開いて、担任のさえない老人教師が入ってきた。担任教師が図書室の美人さんみたいな人だったら、きっと毎日学校が楽しくなるだろうに、なんてよろよろした足取りで入ってくる老教師を見ながら思う。

「……あれ？」

ざわり、と教室内が騒がしくなった。今からの授業は担任の担当教科ではないのだ。
そして担任に続いて――星乃城学園ではない制服の、セーラー服姿の女の子が入ってきた。
更に教室内がざわめく。
由貴はその女の子を目にして、驚愕の表情を浮かべた。思わず立ち上がった。

「あ、あああああ！」

声の主は、女の子を目にした途端の由貴からだった。驚いていた。
椅子から立ちあがって、女の子を指さし、顔いっぱいに素直すぎるビックリをあらしている。
対する女の子は、由貴を一瞥しただけで、ふんっと思い切りそっぽを向いてしまう。

「相沢。何を立っとる。座れ」

担任の老教師に注意されても、由貴はその言葉が耳に届かない程に驚いていた。

左隣の席である春香が、由貴の袖を引っ張ってくる。由貴が気付いて着席すると、春香が顔を近づけてきて、こそりと耳打ちしてきた。

「ゆきたん一目惚れでもしちゃったの？」

ぶんぶんっと首を千切れんばかりに横に振った。それはありえない。

「えー、彼女は今この学園に来たばかりだが、すぐにクラスに馴染みたいとのことなので転校生として今から紹介するぞ。この時間の担当の教師に少し時間を借りたからな」

老教師がぷるぷる震える手で、黒板に板書をはじめた。

「両親の転勤で海外から日本に帰ってきたそうだ。ずっと海外生活でわからないことが多々あると思うから、みんな親切にするように」

チョークでゆっくりと書かれたのは、

――周、防、吹、雪という四文字。

そして女の子が堂々とした態度と毅然とした表情で、一歩前へと出る。

「周防吹雪です、よろしくお願いします」

簡単な挨拶と一礼に教室内から歓迎の拍手が起こった。

周防吹雪。先ほど由貴に純潔を返せと迫ってきた女の子だった。

彼女はきびきびと教室内を歩き、廊下側の一番前の席に座った。その席は確か今日欠席している山田君の席だ。と誰しも思ったが、突っ込める空気ではなかった。吹雪の表情は、どこまでも固く、真

剣そのものなのだ。歓迎の拍手にも、眉一つすら反応を示さなかった。

そして先ほどのことがまるでなかったかのように、教室の真ん中に位置する由貴の席の方を見向きしない。というか思い切りそっぽを向かれた。最悪に嫌われているのだろうか、やはり。

すぐに担任の老教師は去って、本来の授業が開始となった。しかし日常とは違う空気に、生徒たちは心なしかそわそわと落ち着きなく過ごした。

その原因を作っている転校生、周防吹雪はクラスメイトたちと同じように授業を受けている。教科書もノートもない様子だが。教師を見る眼差しは、やはり突き刺すような真っ直ぐだ。教師があまりの尖った視線に、たじろいでいる。

由貴は教科書を立てて顔を隠しながら、吹雪の姿を観察し続けた。先ほどのボロボロの着物姿ではなくなっている。かといって、星乃城学園の指定ブレザーでもなくて。彼女はセーラー服を着ていた。しかもかっちり長い袖の冬服。汗一つかいていないが、暑くないんだろうか。先ほどの苦しげだった様子は微塵もなくなっている。

それにしても、海外から来た美少女転校生なんて、男どもの憧れの設定だろうに。他のクラスメイトたちは吹雪を気にしてはいるものの、その眼差しは熱を帯びたものでないようだった。ただ新しいものに対する興味で視線が集まっているように感じた。

やはり由貴と同じように、彼女に魅力を感じていないのかもしれない。

透けるように白くなめらかな肌と、黒く艶やかな長い髪。幼いけれど、とても綺麗に整った顔立ちだ。凛とした横顔は、ひたすらに教師を見つめ続けている。

首を捻るばかりだ。原因は雰囲気にあるような気がした。

『わたしに近寄らないで』

言葉に出さず、吹雪の放つ空気が語っていた。
そんなピリピリとした時間が過ぎていき、気付けば本日の全授業が終了していた。
転校生がいるという緊張した空気が、その頃には落ち着きを見せはじめていた。クラスメイトたちは帰り支度をはじめたり、部活準備に勤しんでいる。
休み時間には吹雪に声をかけようと、近付いて行く猛者もいた。殺気すら感じられる眼差しの前に負けて、一言も声をかけられないままにすごすごと退散していた。

「転校生に何を驚いていたんだ？」

帰り支度をする由貴の元へ、陽太が近付いて聞いてきた。

「ああ、ちょっとな。さっき会ったんだよ」

吹雪の話題が出たので、由貴の視線が自然に吹雪へと移った。彼女は先ほど着席した状態から全く変わらない様子でむっつりとしている。
やはり刺々しい空気が彼女から発せられているように感じる。

「なんであんなに怒ってるんだろ」

由貴がぽつりと呟くと、陽太がニヤリと顔をのぞきこんで来た。

「さっきの驚き方といい、授業中もずっと転校生のこと気にしていたよな。恋の予感でもするのか？」

「ううん。その予感が全くしない自分に疑問を抱いていたりする」

由貴がきっぱりと言うと、陽太が呆れた表情を浮かべる。
恋の予感は全くしない。……けど。
由貴は椅子を引き、立ち上がる。

「ちょっと……やっぱり大分気になるから行ってくる」

宣言し、由貴は着席したままの吹雪の方へと歩いて行った。
唐突な由貴の行動に、教室内に残っていた生徒たちの注目が集まった。一体神秘的な転校生とどんな会話を繰り広げるのかと、耳をそば立てていた。
由貴は吹雪の席の前に立つ。吹雪が由貴を言葉もなく睨み上げてきた。
それだけで喉がごくりと鳴ったが、負けじと吹雪を見下ろす。

「あのさ。キミ、周防さんはさ、その、俺が純……例のモノを奪ったから返してほしいって言ったよな。それに図書室でのあの氷柱はなんなんだ？　一体どういうわけが――」

「その話は他の人に聞かれたくないの。今は話せない」

吹雪が由貴の言葉を遮り、ぷいっと視線を逸らした。既に挫けそうだ。

「さっきははちゃんと話せなかったしさ……事情を知りたいなって思って」

「人の話聞いてる！？」

吹雪が勢いよく立ち上がった。椅子がガタン、と大きな音を立てる。

「今は話せないって言ってるじゃないの！」
「そ、そんなに怒らなくっても」
後ずさる由貴に気付いたのか、吹雪は少し頬を染めて、大人しく座った。
「……ごめんなさい。わたし後先考えずに突っ走っちゃうところがあって……それでよくお姉ちゃんにも怒られるし」
吹雪が小さな声で由貴に言うでもなく、独り言を漏らしている。
「えーと、さ。……困ってるなら助けになろうか？」
言うと、吹雪が真っ直ぐに由貴を見つめてきて。
「本当に？」
その瞳に、輝きが帯びた。
「ま、まぁ周防さんの例のモノは決して奪ってないし、返せるもんでもないけど。でも助けくらいにはなれるかなーって思ってさ」
由貴は小声で吹雪へと告げる。
吹雪が俯いた。少しの間沈黙し、何か考えているようだった。
暫く黙り込んでいる吹雪の前で、由貴は居心地悪く待った。
「助けてくれるのね」

吹雪の、一点の曇りも見えない澄みきった瞳が向けられる。
なんだか凄まじい後悔が胸に去来したが、言ってしまったことを取り消すわけにもいかない。男に二言はないのだ。由貴は神妙な面持ちで頷いた。

「じゃあ、わたしのことを好きになって」

――頭の中が真っ白になった。
吹雪は冗談を言ったわけではないらしく、どこまでも真剣な表情だ。

「ええとですね……は？　なんだって？」

「だから、わたしに惚れなさいって言ってるの」

照れ臭いのか、少し口をとがらせながら吹雪は言う。

「それは恋愛的な意味で、ですよね？」

「当たり前じゃないの」

助ける＝惚れなさいの意味が全くわからない。由貴は固まる。
出会ってから吹雪の言動に固まり続けている。
しばらく沈黙して、考えた。
考えても考えても、吹雪の言葉の意味が分からない。
……けれど、吹雪に対して言える言葉は、一つしかなかった。

「ごめん、それは無理だ」

良くも悪くも、由貴は正直者だった。

初めて会った時から全く鼓動が高まらない相手に好きになれと言われて、感情をコントロールできるような器用な人間ではなかった。
由貴が言うと、吹雪が息を呑んだ。
――直後。唐突に。
ぼろり、と吹雪の大きな両の瞳から涙が零れ落ちた。

「え？　え？　うわっご、ごめんなさいごめんなさい！」

平謝りしまくる由貴だったが、吹雪の涙は止まるどころか次から次へと溢れ出てくる。
えぐっえぐっとしゃくりあげ、手の甲で一生懸命に涙を拭っている。その様は幼女のようで、ますます由貴は罪悪感に苛まれた。
クラスメイトたちの視線がちくちくと由貴の背中に刺さるのを感じた。
そんな重苦しい空気の中。

「ゆきたん」

ぽんぽん、と肩を叩かれ振り向くと、春香が複雑な表情を浮かべ、立っていた。

「あのね、こんな時なんだけど、ゆきたんにお客様」

春香が言い、指差した教室入り口へと由貴も目を移す。

「げっ」

生徒会長が、いるじゃないか。

「やあ相沢君」

何故一年の教室にいる。しかもこのタイミングで。
生徒会長、二年生の若槻八雲（わかつきやくも）。うるわしきイケメン先輩の登場に、教室内の女子たちはきゃあきゃあ騒いでいる。泣き続ける吹雪と、そばに立つ春香以外は。
生徒会長が流麗な動きでつかつかと教室内に入ってくる。青ざめて震えるばかりの由貴の前に立った。
由貴が陸上部を一身上の都合で退部した後、八雲は何度か説得に赴いてきた。アンタが近付いてくるからやめたんだ変態！　と声を大にして叫びたいところだ。
しかし八雲を前にすると、由貴はカリスマオーラに呑まれてしまい、何も言えなくなってしまう。

「まさかこんな場面に遭遇するとは思わなかったよ。君が女の子に告白されるなんてね。再入部の説得は今度にした方がよさそうだ」

「じゃ、じゃあ早く帰ってください」

用事なんてないだろう、と由貴は入り口へと指を向ける。
その指を八雲に掴まれた。指先に伝わる、手のやわらかな感触。ぞわわ、と全身が総毛立つ。

「信じていたよ相沢君」

「ななな何をですか」

「君は女の子に見向きなんてしないとね。僕のものだから」

妖しげな眼差しを由貴に向け、八雲はさらりと言い放った。
ぴしり、と教室全体の空気が凝固した。

「……！　う、うわあぁあああぁああ！！　変態いいいいいいい！！」

由貴は叫び、耐え切れずに教室から逃げ出した。

第一話　夏のはじまり？

気分は最悪だった。

さっさと家に帰ってストレスを吐き出してしまいたい。由貴は日常以上に溜まってしまった鬱憤に息をつく。

しかし帰宅する前に、立ち寄らなければならない場所があった。

図書室での謎の命の危機が引っかかっている。もう一度図書室を確認せなばならない。というのは建前で、美人さんの顔をもう一度拝んで目の保養をしてから帰ろうと思ったのである。

不純な動機で、由貴は本日二度目の図書室へとやってきた。

入る前に入り口の前で立ち止まって、天上を隅々まで確認。氷柱などない、蛍光灯の並ぶありふれた建物の天井だ。もちろん床に氷柱が突き刺さっていた痕跡もない。やはり、今日の昼の出来事は白昼夢だったのだろうか。

先ほどは全く利用者の姿が無かったのだが、今はちらほらと生徒の姿がある。

机にノートをひろげて勉強をしている生徒もいれば、本を読んでいる生徒、本棚の前に立ち資料を探している生徒など。昼寝している奴もいる。冷房が効いている室内は熱気溢れた外と違って過ごしやすいことから、図書室は意外に人気のスポットなのだろう。

由貴はおそるおそる、図書室内へと踏み込んでいく。

書物の香り。水を打ったように静寂に満ちた場。由貴は場違い感から自然に忍び足になっていた。

首をすくめながらカウンターの前を通ると、お目当ての人物は先ほどと同じようにそこに座っていた。

「こんにちは」

眼鏡の似合う清楚な美人さんが、にこりと微笑み、由貴へと声を

かけてくれた。

「こんにちは！」

由貴は背筋を伸ばし、はつらつと挨拶を返すと、美人さんがくすり、と笑みを深めた。

「本を読む為に来ました！」

「それはとてもいいことですね。貸し出しもしているので、新規の図書カードを作るなら言ってくださいね」

「はい！」

なんてことない会話だったが、美人さんと話せただけで由貴の心は舞い上がった。楽園気分だった。頬が緩み、ニヤニヤ笑いが止まらない。

今日の事件など些細なことに思えてくる。軽い足取りになって、スキップ状態で本棚の前に立つ。

さて。

本の背表紙を眺めながら、由貴は首を捻った。

全く読書の習慣がない由貴にとって、本を読むことなど奇跡に等しい。第一に、一体何を読んでいいのやら全くわからない。整然と並んでいる本を前に由貴は唸るしかなかった。

「由貴」

唸っていると、横から声をかけられた。

その方向を見遣ると、陽太が立っていた。小脇に本を抱えている。

「さっき図書室の場所聞いてきたし、ここにいると思ったんだ」

「ああ。てか陽太、すげーいい場所教えてくれてアリガトウ！　だよ。なんだよもーあんな綺麗な人がいるんだったらもっと早く教えてくれよな！」

由貴は感謝しているのかしていないのかわからないセリフを吐き、陽太が持っている本をさりげなく確認。小難しそうな小説だ。

そうか、こういうのを読むのがいいんだな。と、由貴は小説コーナーへと移動。後ろから陽太も着いてくる。

「さっきのことなんだけどさ」

陽太はなんてことのない口調で切り出してきた。

しかし由貴は嫌な思い出を掘り返されて、眉を顰める。

「周防さんて子と前から知り合いだったのか？　それとも彼女が一目惚れしたのか？」

「昼休みに会った時は、俺と前から知り合いだったって口調だったけど。俺、全く覚えてないんだよな」

「へぇ。そうか」

由貴は本の背表紙に目を向け、適当な本を抜き取った。

ぱらぱらと捲ってみるが、あまりの字の多さに眩暈がした。却下。

本を本棚へと戻す。次、却下。次、却下。

「その作者だったらこっちのがおもしろいぞ」

謎の行動を繰り返す由貴を見かねてか、陽太は一冊の本を抜き取って差し出してきた。

「えええ無理無理。だって字ばっかりだもん」

「何しに来たんだよお前」

由貴は陽太の差し出す本をつき返そうとすると、陽太がにやりと意味深な笑みを浮かべた。

「雪音（せつね）さん、そういえばこの作者の作品は好きだって言ってたな」

「え？　雪音さんって……もしかしてあのカウンターの美人さんのことか！？」

陽太は思わせぶりな態度で頷いた。

「雪音さんかぁ素敵な名前だな」

由貴はうっとりと夢見心地で呟く。

「彼女はこの春から図書室に就任した司書さんらしい。名前は雪音さん。大学を出たばっかりだって言っていたから、年齢は二十二歳だと思う」

「なんだなんだ陽太！　詳しいな！　彼女がいるくせに！」

由貴が声をひそめつつ詰め寄ると、陽太が少し慌てた様子になる。

「いや別に日常会話程度でわかる情報だし。個人的に興味があって

知っているわけじゃないぞ。なんでそこで彼女が出てくるんだよ」

「ふーんへえええ。俺だって負けないぜ！」

由貴は言うと、陽太の手の中にあった分厚い本を奪い取った。

手にとってみるとずしりと重みを感じ、一瞬挫けそうになる。しかしこんなことで美人なお姉さんと仲良くなれるチャンスを捨てる俺ではない！

由貴は勇ましい足取りでカウンターへと歩いて行き、その本をカウンターの上へと置いた。

「これ借りるんでお願いします！」

体育会系のようなノリで本を差し出すと、雪音は最初眼鏡の奥の瞳を丸くしていたが、すぐに柔らかい表情になった。

「ああこの話、私も好きなんです。きっと気に入ると思うから頑張って読んでくださいね」

「はい！　頑張ります！」

「じゃあ図書カードを作るので、この紙に学年とクラスと出席番号、氏名を記入してください」

一枚の紙とボールペンを渡されて、由貴は紙にペンを走らせる。雪音に見せる紙なので丁寧に書かなければ、と一語一語ゆっくりと記入していく。

その様子を横から陽太がのぞきこんできた。

「ほんとお前は情熱的っていうか、そういう面は見習いたいよ」

褒められているのか馬鹿にされているのか。陽太の言葉を、顔を上げずに聞く。

「でもさ、なんで周防さんは駄目なんだ？　可愛い子なのに」

由貴のペンがピタリと止まる。

うう、と唸り声が出た。

「人の傷口をひろげようとするな！　早く忘れてしまいたいのに！」

「告白されたなんて由貴にとっては素晴らしい出来事なんじゃないのか？　まあ彼女を泣かせちゃったのはまずかったとは思うけどさ」

「告白？　あれが告白と言えるのか？　惚れなさいって何？　超上から目線！　ありえん！　はやりのツンデレでも意識したんか？　あーだめだめ。俺そーゆーのは受け付けてないの。告白するんだったらさ、もっとこう、素直に！　好きです由貴君！　とか言ってこそだろ！？」

「おい由貴」

陽太が昂ぶっている由貴を止める為か、肩に手を置いてきた。

由貴はその手を振り払い、顔を上げずに続けた。一度不満を口にしてしまうと止まらなくなった。

「大体、泣くのとかも卑怯だろ！　俺一方的に悪者じゃんか！　無理！　あー無理無理！　周防吹雪、絶対無理だね！」

そこまで言って、顔を上げた。

一気に捲くし立てたので、由貴の頬は紅潮している。
目の前にいる周防吹雪が、自分の昂ぶった感情から見える幻かと思った。幻であってほしかった。
陽太が顔に手をあてて「あちゃー」と呟いている。
「え？　なに？　ほんもの？」
と由貴が呟いた次の瞬間には。
――ぼぐぅっ
吹雪が目の端に涙を浮かべて、由貴を思い切り殴りつけてきた。
平手打ちなんて生やさしいものではなく、拳で右ストレート。
強烈な一撃が頬に見事に決まり、由貴はゆっくりあお向けに倒れていく。目の前に火花が散っている。
床に後頭部を打ちつけ、視界がぐにゃりと歪む。
「言っておきますけど！　あれは告白なんかじゃないから！　あなたみたいな最低な奴、好きなわけないじゃない！　最低！　あー最低最低！　相沢由貴、最悪最低野郎！」
吹雪は吐き捨てて、走り去ってしまった。
殴られた頬をおさえ、凄まじい痛みに顔半分がもげたようだった。
由貴は立ち上がれない。呆然と天井を見上げる。
陽太が「大丈夫か？」と見下ろしてきた。
「ごめんな、まさか周防さん本人が現れるとは思わなかった。気付いた時には由貴もう止められなかったし」
「……気にするな。言っちゃったの、俺だし」
しかししばらく立ち上がれそうにない。滅茶苦茶痛い。正直泣き

そうだった。
おそらく吹雪のことをとてつもなく傷つけてしまったのだろうが、それにしたってグーで殴るとは。
陽太に並んで、雪音が由貴をひょいとのぞきこんできた。
はっと正気に返って、由貴は上半身を起こす。
雪音は本を差し出し、
「貸し出し期限は一週間です。読んだら返しに来てくださいね」
何事もなかったかのように言った。
先ほどの悶着の間も、貸し出しの事務処理をしていたらしい。
「あ、はい」
由貴が本を受け取ると、雪音は眼鏡の縁を触ってかけ直してから、カウンターの向こうへと戻っていく。
「また遊びに来てくださいね」
にっこりと微笑む雪音につられ、由貴もにへらと笑う。
「また来ます！」
立ち上がれないと思っていたのはどこへやら、由貴はしゃきっと立ち、言い放つ。
図書室を出る際、雪音に大きく手を振ってアピールしておいた。
陽太も一緒に別館の外へと出てきた。
「立ち直り早いな。顔がえらいことになってるわりに」

陽太に言われて、由貴はため息をついた。

「ぜんぜん立ち直ってないっつーの。今日は完全に厄日だった……頬痛いよチクショウ。でも雪音さんと少し親しくなれたことだけが心のオアシスだな！　俺読むよ雪音さんの為に！　この分厚い本を読破してみせるぜ！　これって愛の力だよな！」

「……立ち直ってるだろ、完全に」

呆れた様子で言う陽太に手を振って、由貴は帰宅する為に坂道を降りていく。

心の端にひっかかっているのは――本日衝撃的な出会いをした転校生、周防吹雪のことだった。

『わたしの純潔を奪ったあなたを、許さないから』

『わたしのこと、好きになって』

『あなたみたいな最低な奴、好きなわけないじゃない！　最低！あー最低最低！　相沢由貴、最悪最低野郎！』

由貴はむっと頬を膨らませた。更にズキズキと頬が痛み、そのことで余計に苛立ちが募る。

吹雪の意味不明すぎる身勝手な言葉、行動。どうしようもなく腹が立った。

最悪な関係になってしまったが、もう知ったことかと諦める。

家に帰ってから窓を開け放っての絶叫の言葉は、もちろん、もう決まっている。

＊＊＊

「俺は、周防吹雪以外の、全ての女の子が大好きだぁあ！！」

――母親に、思い切り後頭部を殴られた。

第二話　目指せ学園アイドル！？

太陽が沈んでしまった時刻に関わらず、部屋の照明はついていなかった。暗闇と静寂に包まれたマンションの住居。冷房だけが効きすぎているのか、ドアを開けた瞬間の外気との気温差は凄まじかった。

ひんやりと身体を包み込む冷たさが心地良く、目を細めた。

玄関で靴を脱いでから手探りにスイッチを探し当て、パチリと点ける。

スリッパを履いて、リビングへと続く扉を開いた。

玄関の小さな照明で、リビングもなんとか見渡せる程度の視野の中、片隅で蹲って膝の中に顔を埋めているセーラー服姿の少女を発見する。

雪音は溜め込んでいる全ての厄介ごとを吐き出すように、息をつく。

「暗い」

言うと、少女ははっと顔を上げた。

泣きはらしたのであろう目が赤く腫れている。その少女、吹雪が雪音の姿にようやく気付き、慌てて立ち上がった。

「ご、ごめんなさい。陽が落ちてるの気付かなかった」

雪音はリビングの照明を点ける。肩にかけていた鞄をソファーに置いてから、改めてもう一度眼鏡の奥から吹雪へと瞳を向ける。

「暗いのは吹雪よ」

「……ごめんなさい」

吹雪が気まずそうに俯きながら、呟いている。

「吹雪、あなたってなんだってそんなにヘタクソなの？」

「わたし……お姉ちゃんみたいに器用じゃないもん」

拗ねた口調の吹雪へと雪音は歩み寄っていく。腰を屈め、華奢な肩を抱いてやった。

「知っているけどね。そんなに落ち込むのなら突っ走って玉砕する癖を直しなさい」

本当に、見ていられない。

雪音は小さい妹の頭を労わるように、撫でてやる。

吹雪が肩を震わせて泣き出してしまった。

「どうしようお姉ちゃん」

嗚咽交じりに言う吹雪に、雪音は頭を撫でてやることしかできない。

本当に、この子は不器用で、泣き虫だ。白い頬が紅潮し、瞳からは純粋な雫がとめどなくこぼれ落ちていく。

久しぶりに会っても、やはり吹雪は変わらず吹雪のままだった。

守ってあげなきゃ何もできない、私の妹。

「やっぱり今まで通りの作戦で行く？　反対してきたのは吹雪だけど」

「だめだめ！　いきなり殺すなんてそんなことは……」

吹雪がぶんぶんと強く首を振っている。長い黒髪が一緒に揺れる。

雪音は思わず柔らかい笑みをこぼしていた。

「吹雪は優しいのね。たかが人間一人の為にまさかあの場面で飛び込んでくるとは思わなかった」

「……わたしの為に犠牲者が出るのは嫌なの」

「無茶なことはしないで」

今日の昼休み、由貴をラブレターで誘い出したのは、雪音であった。もちろん、命を奪う為に、だ。その為にわざわざ人払いまでして舞台を整えておいたのに。

あの局面で邪魔が入るとは、雪音も予想外だった。

自分を追いかけて、妹がこの世界に飛び込んでくるなんて。

「私の洗脳能力でなんとかあなたを転校生として、この世界にねじ込むことはできたけれど。本来あなたはこの世界にいるべきではない存在なんだから」

「だってお姉ちゃんは、私が止めなきゃ相沢由貴を殺すでしょう？　他の方法だってあるのに」

「吹雪が言う他の方法を、達成はできそう？」

雪音は意地悪かもしれないが、はっきり問いかけた。吹雪が八の字眉になって、どんよりと黒雲を背中に背負ってしまった。

「どんなに時間かけたって無理かもしれない。相沢由貴は、わたしのこと全く微塵も好きになってくれそうにない」

「うーん……」

確かに。相沢由貴は吹雪に好意を持つどころか、おそらく今日の出来事で真逆の感情を抱かせてしまったに違いない。

殺すのが何より一番簡単な方法なのだ。けれど、吹雪はそれだけはダメだと言い張っている。

不器用すぎる妹を見下ろし、雪音は再びため息を漏らす。

「そうだなぁ」

考えてもいい案は浮かばない。雪音は根がのんびり屋である。しっかり者に見えて、どこか抜けていると評されてしまう。

「とりあえず、ご飯食べに行こうか。腹が減っては戦が出来ぬってね」

「戦じゃないし」

「まぁまぁ。お姉ちゃんがおいしいものいっぱいご馳走してあげるから」

雪音が言うと、吹雪の涙が途端にピタリと止まった。

「わたし、ぱふぇ食べてみたい！」

先ほどまでの暗い表情が嘘のように瞳を輝かせる吹雪に、雪音は愛しい気持ちがこみ上げて頭をくしゃくしゃと撫でた。

単純な妹で助かった、と胸を撫で下ろしながら。

＊＊＊

吹雪のリクエストで、近くにあるファミリーレストランにやってきた。この世界に来たばかりの吹雪にとっては何もかもが新鮮で珍しいらしく、いちいち感動している。好奇心に満ちた瞳が、キラキラ輝いて更に幼く見える。

口の周りをアイスクリームでベタベタにしている吹雪を正面にして、雪音は食後のアイスコーヒーを飲んでいた。

頃合をみはからってウェットティッシュを差し出すと、吹雪は頬をピンク色に染めながら口の周りを拭いている。

「吹雪にはやっぱり女の要素が足らないのだと思う」

思いついて言ってみると、吹雪は眉根を寄せた。

「だってそれは純潔が」

「それだけじゃないと思うんだよね、お姉ちゃんは」

吹雪がぐっと詰まる。

「可愛げっていうのかな？　もうちょっと殊勝にならないと」

「それって相沢由貴に対して下手に出ろってこと？」

いかにも嫌そうに吹雪が言い放つ。

「下手に出ろって言うと言葉が悪いけど、そういうことになるのかなぁ」

雪音は特に意識せずとも嫌というほど男が寄ってくる。なので改めて惚れさせる方法、と考えてみても明確な答えは導き出せなかった。

眼鏡の縁を触りながら、考え込む。

「そうだ！　かわいい服を着てみるとかどうだろう」

「……服は着替えられないってお姉ちゃんが一番知っているでしょう」

軽く睨まれて、雪音は誤魔化し笑いを浮かべた。

そういえばそうだった。吹雪のセーラー服を作った張本人が度忘れしてしまっては元も子もない。

「いっそ全部事情を話しちゃうとかはどうだろう」

言ってはみたものの、吹雪が受け入れないであろうことは予測できていた。

予想通りに吹雪は強く首を振った。

「わたしたちの世界のことをこの世界の人間に話すのはご法度でしょ。お姉ちゃんだってわかっているはず」

「そうなんだけどね。でも、一人の人間に話したところで何か影響があるとは思えないし」

「駄目。そういう油断がわたしたちの立場を危うくするかもしれない」

「吹雪は固いなぁ」

「固くて結構だよ。相沢由貴は全然信用できないし」

「悪い子じゃないと思うんだけどな」

放課後、息を弾ませて図書室に現れた相沢由貴の姿を思い返してみる。

雪音の一挙一動に素直な反応を返す由貴が浮かび、雪音は思わず微笑みがこぼれた。

「あ、なんか思い出し笑いしてる」

おもしろくなさそうに吹雪は口をとがらせた。

「相沢由貴はお姉ちゃんのことが好きみたいだね。純潔を取り戻すのがわたしじゃなくてお姉ちゃんだったらよかったのに」

拗ねている吹雪を見て――くすりと笑ってしまった。

やはり吹雪はまだ幼い。

「『純潔』を持つ者同士は接触できない。だから私は彼から純潔を取り戻すのは不可能よ。それにね、彼はまだ本当の恋愛を知らない。私に対しては外見だけ見て憧れているだけだから」

そういう眼差しを何度も受けたことのある雪音だから、分かる。

けれど吹雪は由貴の感情を勘違いして更に落ち込んでいるのか、

さすがにパフェを食べるスプーンが止まっている。憂いに満ちた瞳を下に落とし、深くため息を漏らした。

「大丈夫よ、まだ時間はあるんだから」

励ます為に言うが、吹雪の顔は上がらない。

雪音も言ってみたものの、状況は絶望的だと思っていた。

だからこそ、予防線は張っておかねばいけない。

雪音は横目でちら、と遠く離れた席に座るカップル風男女へと目を遣った。

カップル風男女はただ食事をしている様子に見えるが、さりげなくこちらを観察している。

赤髪の少女と眼が合い、さっとその視線は逸らされた。雪音は愉しげに笑みを浮かべてから、吹雪へと視線を戻した。

「由貴君が吹雪のことを好きになる方法、か。何かないかな」

「もう無理かもしれない」

「簡単に諦めないの。最後まで頑張るからって吹雪は私と約束を交わしたのでしょう？」

厳しい表情を作って言った。

この世界に飛び込んできた吹雪と、交わした約束。覚悟と決意。吹雪がそれを破棄するような子ではないと雪音は知っている。

吹雪はしばらく俯いていたが――

「うん」

強く頷いて、顔を上げた。瞳に宿る、決意の光は消えていない。

「わたし、頑張る」

やっぱり単純な妹に、雪音は微笑んでよしよし、と頭を撫でてやった。

「由貴君が吹雪に恋してキスしてくれたら『純潔』はあなたの元に戻って来るのだから。そうしたら、一緒に元の世界に帰りましょう」

第二話　目指せ学園アイドル！？

明確な作戦は全く思いつかなかった。
周防吹雪という少女は、いつだって感情任せで猪突猛進だ。
寝不足と泣きすぎで、腫れぼったく重たい瞼をこすりつつ、一人星乃城学園の門を潜る。この世界に来てからの初めての夜で昂ぶっていたこともあり、結局一睡もできなかった。
吹雪は熱気の纏わり付く不快な空気を振り払うように、大股歩きで教室へと向かう。
転校二日目。吹雪は気持ちを極限まで張り詰め、眉を吊り上げ、教室の扉を開ける。異質なものが混ざったような眼差しをクラスメイトたちから向けられて、撥ね返すバリアを作るように硬い表情で、自分の席へと向かった。
人間と仲良くなりたいなんて、微塵も思っていない。人間なんて、大嫌い。
目的がなければこんな世界になど、来たくなかったのだ。
今日も吹雪の心は、どこまでもささくれた棘を放っていた。
新しく用意された吹雪の席に座ってから鞄をかけ、視線だけそっと教室の中心部へと移す。
相沢由貴は既に登校してきていた。友人のクラスメイトと何かを話しこんでいる様子である。
昨日の出来事など全く気にしていないような、由貴の明るい表情が目に映る。
吹雪は腹立ちを覚え、眉を顰める。腹の底からわきあがる感情で、頬が熱い。
相沢由貴に自分を惚れさせる方法はないものか。
……やっぱり、全くいい案は浮かばない。
ぐるぐると思考は巡って、昨日の相沢由貴の『周防吹雪、無理！』の言葉を思い出してしまった。もう何度も頭の中で再生された言葉

で、気持ちが沈みこむ。
――わたしだって、あなたのことなんか絶対無理なんだから。
と、心の中で吐き捨てることぐらいしか出来ない。

「おはよう吹雪ちゃん」

突如声をかけられて、吹雪は現実に戻る。
声が聞こえた方向へ視線を向けると、見知らぬ女生徒が吹雪の机のすぐ前に立っていた。
吹雪は怪訝な表情を浮かべ、女生徒を見上げる。大体の生徒が吹雪の無言の眼差しに負けて退散していくのだが、その女生徒は吹雪の眼差しを真っ直ぐ受け止めた。
照れ臭そうにはにかんだ笑顔を浮かべている。

「えとね、泉田春香って言います。吹雪ちゃんとお友達になりたいなって思って声をかけてみたんだけど……迷惑だった？」

春香の言葉に、吹雪は息を呑んだ。
まさか自分と友達になろうなどと声をかけてくる人物が現れるとは。人間を撥ね付けることしか考えていなかった吹雪にとって、春香の率直な言葉にどう対処してよいのかわからない。
ただ、頬が紅潮していった。

「あ、ぅ」

気の利いた返事も追い返すことも出来ずに、変な声を出してしまう。
春香は嬉しそうに目を細め、吹雪へと顔を近づけてくる。

「ずっと外国暮らしって先生が言ってたけど、日本語大丈夫だよね

？　昨日ゆきたんと普通に話してたし」

「……う、うん」

吹雪は時間をかけて、やっとのことで頷く。

「よかった。私英語全然話せないんだ。吹雪ちゃんはやっぱり英語得意なのかな。もうすぐ期末テストだし憂鬱ですなぁ」

テスト、の言葉に再び固まった。

目的以外のことなど頭になかった。吹雪にとって学園の生活など二の次であり。テストを受けるなんて、初めての経験だ。

心の中であわあわと焦っているのが、思い切り顔に出てしまったらしい。

「吹雪ちゃんもテストとか苦手？」

春香が軽い調子で聞いてくる。

「う、うん」

「一緒だぁ。なんか嬉しい」

春香は柔らかく微笑んだ。春香の心をほぐすような温かな笑い顔に、吹雪はドキドキと鼓動が高鳴り、思わず胸をおさえる。

同性なのに心ときめくほどの、魅力。

柔らかそうな茶色い髪の毛が長く波打ち、春香の雰囲気によく似合っている。ナチュラルなメイクは全く嫌味じゃない。グロスを塗っているらしい唇は柔らかそうに艶めいている。

ああそうか。こういう唇がキスしたくなるんだ。吹雪は春香の姿

を凝視してしまっていた。
女の子らしい体つきに、制服の上からでも分かるくらい胸が。
気付いた途端、驚愕。自分のおさえている胸元のあまりの感触のなさに。
吹雪があまりに凝視し続けていたら、春香が驚いたように目を瞬かせた。

「私の顔になんか付いてる？」

「どうしたら……」

「ん？」

「どうしたら、魅力的になれるのかな」

思わず呟いていた。言ってしまった後に恥ずかしさが込み上げて、もともと紅潮していた顔が更に熱くなっていく。耳の先まで赤くなってしまっていた。色が白い吹雪は赤面するとわかりやすい。

「ええっ吹雪ちゃん全然今のままで可愛いよ？」

「……可愛くない」

つい、ちらりと、由貴の方向に視線を走らせてしまった。
その視線の先に気付いたらしい、春香が苦笑を浮かべた。

「昨日のこと、気にしてるんだ？」

春香も昨日の放課後教室にいたらしく、事情は知っているようだった。

吹雪は俯くことしかできない。

「そうだなー……てか私に指南してほしいって無理ある無理ある。全然フツーの女子高生ですよ？　魅力的になる方法なんて全然身につけてないし。私が教えてほしいくらいだよ」

春香は充分魅力的だし、クラスの男たちの視線を集めている。吹雪にもわかるくらいに熱い眼差しが一点集中。特に春香の胸元へと。

春香本人は鈍いのか、全くの無自覚のようだ。

姉と同じタイプか、と吹雪は落胆し肩を落とす。

「あ、そだ」

何か思いついたのか、春香が人差し指をぴん、と立てた。

「そういう話にうってつけの人、私知ってるよ」

「魅力的になる方法を教えてくれる人？」

「うんうん。学校終わったら吹雪ちゃんに紹介してあげるよ」

にこやかに提案した春香に、吹雪は断る理由などあるわけがない。素直にこくこくと頷く。

その仕草が春香のツボを刺激したのか、「吹雪ちゃん超かわいいよー」と頭を撫でられた。

姉や春香のツボを刺激している場合ではないのだが。

吹雪はもう一度由貴を見遣り、心の中で誓う。

見てなさい、相沢由貴。昨日言った言葉を後悔して土下座させるほど、魅力的になってやるんだから。

＊＊＊

メラメラと燃えている間に、気付けば本日の全授業が終了していた。燃え上がりすぎて何もかも雑音は一切耳に入ってこなかった。

放課後のクラスメイトたちが解放感で浮き立っている空気の中、春香が再び吹雪の席へと近付いてくるのが見えた。

「じゃあ行きましょうか」

春香が柔らかい表情を浮かべ、吹雪へと告げた。

「うん！」

待ってましたとばかりに張り切って返事をし、席を立つ。

カバンを手に取り、手招きする春香の後に続いて教室を出た。下校を始める生徒や、部活に向かう生徒たちの群れに混じり、二人も廊下を歩いて行く。

「吹雪ちゃんって積極的だよね」

春香が吹雪の方へと軽く顔を向けて、言った。

「積極的？」

「うん。だって転校初日に告白なんて」

「あ、あああれは告白なんかじゃ」

「羨ましい。私もそんな風に積極的になってみたいから」
笑顔の春香にそんな風に言われてしまうと、強く否定ができなくなってしまった。吹雪は赤面し、歩調を速める。
「積極的にならないと、ずっと友達のままなんだよね……」
先に歩いていた吹雪の背中に届いた、春香の呟き。
吹雪が「え？」と振り向くと、春香はにっこり微笑んでいた。
「なんでもないよ。いこ？」
春香は玄関まで行ってから靴に履き替え、本館を出ると真っ直ぐ別館の方へと歩きだした。吹雪はひたすら真剣な表情で、春香についていく。
別館の前まできて、一瞬戸惑った。
まさか別館二階の図書室にいる、自分の姉が女性の魅力を指南してくれる人として紹介されるのではなかろうか。
しかし吹雪の心配は杞憂に終わった。春香は二階へと続くらせん階段はのぼって行かずに、一階の廊下突き当たりに向かった。
たどりついた角部屋の一室の扉をノックしている。
「せんぱーい、いますかー」
春香が声をかけると、
「おー入ってこーい」
扉越しに声が返ってきた。
声に従い、春香はドアノブをまわし、がちゃりと扉を開く。

薄暗く、狭い室内。物置か何かなのか、色々な物が積まれて窓も遮られて日光が入ってこない。手作りらしい木材の台や、机、ハンガーにかけられた大量の衣類などが大部分を占めている。何に使うものなのか用途は不明だ。壁に作りつけられた棚には、作り物の食べ物や造花などが溢れている。

その窮屈な部屋の片隅で、熱心な様子でちくちくと縫い物をしている女生徒が顔を上げた。

「来たな幽霊部員。ちっとは部に奉仕する気になったか」

「てへ」

春香は軽く舌を出し、笑顔のまま部屋の中へと踏み込んでいく。吹雪も強張った表情のまま続いた。

「笑って誤魔化そうったってそうはいかないぞ！　来たからには今日はみっちり稽古してってもら……ん？　そっちのちっこいのは？」

女生徒が春香の背後に隠れるように立つ吹雪の存在に気付き、顔を向けてくる。

ショートヘアで、涼しげな目の女子。顔立ちがすっきりと整っていて、ほっそりとしたモデル体型。可愛いというか、格好良い女の子だ。そのシャープな瞳に見つめれて、吹雪は緊張した。

「彼女は周防吹雪ちゃん。私のクラスに昨日転校してきた子です。で、こっちの先輩は二年生の稲葉時雨（いなば しぐれ）先輩。演劇部の部長なの」

春香が見つめあう二人の間に立って、お互いの自己紹介をしてくれた。

吹雪はガチガチになりながらも、時雨に向かって頭を深く下げた。

「ふむ。合格！　わが演劇部は君を受け入れよう！」

「あ、違いますよ先輩。吹雪ちゃんは入部希望じゃなくって」

「君を学園のアイドルにしてみせる！　アタシを信じてついてきたまえ！」

「……ごめんね、ちょっと変わった先輩なの。適当に受け流しておいていいから」

春香が耳打ちしてきたが、その時にはもう吹雪の耳には届いていなかった。

「学園のあいどる」

吹雪にとってその響きは、とてつもなく魅力的なものに思えた。

学園のアイドル吹雪☆

←

由貴『俺はあんな可愛らしくて魅力に溢れた子にヒドイことを！ごめんなさいごめんなさい吹雪様ぁあああ！』

←

土下座。

単純思考吹雪は頭の中で思い描いた図式に、瞳をこれ以上ないくらいに輝かせている。

「わたし、頑張る」

吹雪が言うと、時雨はがしっと吹雪の両手を握った。

「いい答えだ！　アタシはこういう人材を待っていたのだよ！」
「はい！」
「主演を取る気で猛特訓だ！　汗を輝かせろ！　血反吐を吐け！
目指せ全国大会！！」
「はい！　……全国大会？」
吹雪は首を傾げる。
「たまにはいい仕事をするじゃないか春香」
「えへへ、ありがとうございます」
状況をうまく把握できていない吹雪をよそに、時雨が春香を褒め称えている。春香がはにかみ、素直に頭を下げ……
少しの間の後、ばっと顔を上げた。
「演劇部に入部させる為に吹雪ちゃんを連れてきたんじゃないんですってば」
「入部希望じゃないだと？　……じゃあなんの為に連れてきたんだ」
時雨は少し不満気な表情を浮かべつつも、春香に問いかける。
「吹雪ちゃんね、魅力的になりたいって思ってるんです。時雨先輩だったら日々そういう研究してるから、吹雪ちゃんにいい答えをあげられるかなあって思いまして」

「ふーん」

時雨が春香の言葉を受け、改めて吹雪の姿を上から下まで観察しはじめた。

吹雪は時雨の凝視に居心地悪さを感じ、もじもじと立ち尽くす。

「君はそうだな……妹属性だ」

「「妹属性？」」

春香と吹雪は同時に聞き返した。

時雨が満足げに頷いている。

「女の子には男に対するあらゆる萌え要素があるのだよ。属性にわけられるというのがアタシの研究結果だ。春香ならその破壊力抜群の胸、デカパイ属性だな」

春香は頬を染めて、腕で胸を覆い隠す。

「例えに出さないでください！　デカパイ属性ってなんか宇宙人みたいな響きじゃないですか。せめて巨乳属性とか……」

気にするべきところはそこなのだろうか。

時雨は春香を無視し、吹雪にビシリと指を向けた。

「で、君だったらその幼女ばりの童顔と、小生意気そうな雰囲気。まさに妹。男に『お兄ちゃん』と上目遣いで、瞳をウルウルさせてみるのだ。するとどうだ、相手はもう君に夢中になるに間違いないぞ！」

「夢中」

時雨の言葉は謎の説得力に満ち溢れている。吹雪は時雨に尊敬の眼差しを向け、瞳を輝かせる。

「妹属性といえば！　やっぱり欠かせないのはツインテールだ！」

時雨が言い放つ。「失礼」と声をかけてから、あっという間に吹雪のきっちり揃えられた髪の毛を、上手に高い部分で二つにしばり上げた。その早業に吹雪も春香も唖然とする。

ツインテールになった吹雪を見下ろして、ますます時雨は満足そうな表情を浮かべている。

「服装はそうだな、メイド服なんて手もあるぞ」

演劇部の備品が溢れている部屋の中を漁って、時雨はどこからかメイドの衣装を引っ張りだしてきた。

「これ着て『おかえりなさいませご主人様』とか言いたまえ。その言葉で男はメロメロズキュン間違いない！」

時雨がにこにことメイド服を差し出してくる。

「あれ、『お兄ちゃん』って言うんじゃなかったんですか？」

春香の突っ込みにも時雨の笑みは崩れない。

「『おかえりなさいませご主人様……じゃなくてお兄ちゃん！？私のお兄ちゃんは、あなただったの……？』なんてどうだ」

「カオス設定ですね」
時雨と春香のやり取りを見ながら、吹雪はメイド服を受け取らずに遠慮がちに首を振った。
「わたし、服は着替えられないから」
事情があってセーラー服を着ているのだが、そのことを二人に話すわけにもいかない。ただメイド服を拒否しているようにうつったかもしれない。ただメイド服を拒否したかった、という部分もあったが。
時雨はさほど気にせずに、メイド服を仕舞った。
「よく考えてみれば、セーラー服も充分萌え要素ではないか。グッジョブだ吹雪！」
「かわいいよ吹雪ちゃん」
時雨と春香に言われて、吹雪は瞳の中に炎を燃やした。
これだったらいける！　学園のアイドル！　満々と自信を身に着けて、吹雪は時雨に一礼をして、颯爽と部屋を飛び出した。
「あ、待って」
引き止めている言葉を発した、時雨の言葉はもう耳に届かない。
猪突猛進娘は――絶妙のタイミングで、相沢由貴を発見した。由貴は鼻の下を伸ばしながら、図書室へと続く階段を昇って行こうとしている。
吹雪は由貴の元へと軽やかに駆ける。メロメロパンチな由貴を想像するだけで、心躍った。

由貴も猛然と近付く吹雪の姿に気付いた様子だった。気まずそうな表情を浮かべながらも視線を泳がせつつ、立ち止まった。

「「あの」」

二人は同時に言い放つ。
同時だったので、お互いに遠慮して言葉が止まった。
階段の途中にいる由貴を、吹雪は見上げる形になっている。
……これはもう行くしかない！
吹雪は心を決めて、由貴をぐっと見つめた。
もちろん瞳はウルウル。

「お兄ちゃん」

……
……沈黙。
完全に由貴は固まっていた。
そして二人の間に、寒々とした風が吹きぬけた後。

「……俺、お前のお兄ちゃんじゃないし」

ものすごく当たり前な突っ込みを冷静に放った由貴に対し――穴があったら入りたいほど恥ずかしくなった吹雪は、凄まじい速さでその場から逃げ出した。
演劇部備品の置いてある部屋へと舞い戻る。
顔は真っ赤、息は切れ切れ、半泣き状態で吹雪は後ろ手に扉をバタンと閉めた。
その部屋には先ほどと全く変わった様子もなく、春香と時雨が立っていた。

「一つ言い忘れたけど、妹萌えしない相手にはこの作戦は有効じゃないと思われる」

時雨の言葉に、がくっと吹雪はその場に崩れ落ちていく。
床に両手をついて、打ちひしがれた。

「もう遅いです、先輩」

「挫けるな吹雪！　特訓だ！　演技力を身につけろ！　舞台の上で輝きを放て！　それこそが学園のアイドル！」

どこまでも熱苦しい時雨が言い放つ。
ベソをかいている吹雪へと、手を指し伸ばしてくる。

「吹雪、君だったら、必ず学園のアイドルになれるとアタシは信じてるぞ」

キラキラキラ。
時雨の瞳の輝きに魅せられ、吹雪は時雨の手を取る。

「負けない！　頑張る！」

時雨に手を引かれ、立ち上がる。

「うむ！　では演劇部の稽古に向かうぞ吹雪！」

「はい！」

二人は手に手を取って、青春の輝きを放ちながら部屋を飛び出していく。

「えーと……吹雪ちゃん、演劇部に入部した、ってこと……？」

ぽつんと一人立ち尽くす、春香の呟きを残して。

第二話　目指せ学園アイドル！？（前書き）

久々の更新部分が一番アレなところですいません……
この作品はノーマルな恋愛モノです！
……説得力がなさすぎるｏｒｚ
ちょっと最近手が空いているので、早めの更新を目指してみます。

第二話　目指せ学園アイドル！？

日々は流れ、うれしたのしい夏休みに突入した。
由貴にとっては、全く嬉しくない夏休み開始である。
じりじりとアスファルトを焦がす太陽光線。蝉の声。本来なら家でダラダラと一日ゲーム三昧で過ごす予定だったというのに。由貴は額の汗を拭い拭い、星乃城学園へとやってきていた。
教室のドアをガラリ、と開ける。
悲しいくらいに教室内はがらんとしていた。やはり一年生一学期の期末テストから赤点まみれなのは、由貴くらいなのか。星乃城学園では期末テストで赤点を取った生徒には、夏休み開始から一週間みっちりと補習が待っている。

「寂しいよぅ……」

ぽつりと呟き。自分の席へと移動して、着席する。同時にドアが開く音。由貴は仲間出現に目を輝かせ、顔を上げた。
――なんと、吹雪だった。

「あ。よ、よお妹」

「そのネタもう一回引っ張ってきたら殴る」

相変わらずの冬用セーラー服姿の吹雪は真っ赤になって、由貴を睨み。自分の席へと座った。由貴の方を意識して見ないようにしているようだ。ムッツリと横を向いている。
転校生、周防吹雪が学園に来てから一ヶ月弱。夏休み前には演劇部に入部した、との噂を耳にしたし、友達も出来た様子だ。彼女も徐々にこの学園に馴染んできているようだ。由貴との関係は全く馴

染んではいないけれど。

「周防さんも補習なんだ」

それでもこの静かな教室内には、吹雪と由貴しかいないのだ。由貴は仲間意識を芽生えさせて、話しかけてみる。

「悪い？」

思い切り睨まれた。

「いやいやいや。仲間がいるのは心強いっす」

由貴は吹雪の睨みを普通に受け流すくらいには、彼女の存在に慣れてきていた。愛想笑いを浮かべて言ってみる。

「……」

完全に無視された。

補習仲間がいたことを嬉しく思った気持ちが、途端萎んでいく。これから一週間もの間、二人で補習を受けるのか。更なる憂鬱な気分が身体に圧し掛かってきたような。

沈黙が気まずい。由貴は視線を泳がせつつ、しかし教室内に見るものなんて何一つない。やはり、吹雪の存在が気になってしまう。

「……そういえば周防さんの純潔のことなんだけど、解決したのか？」

話題、話題を、と頭の中に出てきたのはやはり『純潔』の話題だった。

転校初日以来、吹雪からその話題は一度も出てきてはいないが、何か思い悩んでいる様子はずっと変わっていない。
吹雪は瞳に更に厳しさを込め、由貴を見つめてきた。
「そのことはもう忘れて。今はあまり考えないようにしているから」
「そうか。まあ周防さんがいいなら、いいんだけどさ」
「……いいわけないじゃない」
吹雪が小さな声で呟いた。由貴の耳には届いていたが、彼女にこれ以上何か言えることもない。諦めて息を吐き、視線を下に落とす。
開け放たれた窓から風が入り込んでくる。汗ばむ教室ではありがたい筈の爽やかな風が、この場では異常なぐらい寒々とすら感じる。
今となっては、少しでも早く補習の教師に来てもらいたい思いだった。教室内で二人きりのピリピリした雰囲気が、由貴の気持ちを堪らなくさせる。
「あのさ！」
耐え切れなくなった。思い切って、吹雪に向けて声をかけた。
吹雪は怪訝な表情ながら、顔を向けてくる。
「ずっと気になってたんだけど……俺さ、色々と周防さんにひどいこと言っちゃっただろ。図書室でのこととか、ずっと謝りたくって。……ごめん！」
由貴はガバっと頭を下げた。
「……ああ、そのこと。わたしもあなたのこと殴ったし、お互い様」

吹雪は表情を変えずに言った。
由貴はほっと胸を撫で下ろす。やはり泣かせてしまったことにずっと罪悪感があって。あまり気にしていない吹雪の様子に、心が軽くなった。

「よかった。俺って思ってることすぐ口にしちゃうみたいでさ」

「そうみたいね」

「あ、やっぱりわかる？」

「顔に書いてある。馬鹿正直」

吹雪に言われ、由貴は思わず顔を触って確かめた。
すると――吹雪がぷっと吹き出した。
由貴はとてつもなく驚き、固まる。

「本当に書いてあるわけないじゃないの」

吹雪に突っ込まれても、硬直したままだった。暫く吹雪を凝視してしまっていた。そういえば出会ってから泣き顔や怒った顔ばかりを見てきた、ということに気付いた。
笑っている顔を見たのは、初めてかもしれない。
由貴は自然、顔が綻ぶ。やはり吹雪も女の子だし、女の子が喜んでくれるのは嬉しいものだ。

「笑ってる方がずっといいよ、周防さん」

「え？」

吹雪に聞き返されて、由貴は自分の言葉のクサさが恥ずかしくなって、頬をかいた。
少しの間の後、吹雪もようやく由貴の言葉の意味を悟ったらしい。赤面して、俯いてしまった。

「……わたし、笑ってる方がいい？」

遠慮がちに聞いてくる吹雪。

「……ま、まあ」

由貴は頷いた。
吹雪は一拍おいてから、顔を上げ、
にっこり、と微笑んだ。一輪の花が咲いたような、可憐でひそやかな微笑みを前に、由貴は息を呑む。
しかし恥ずかしくなったのか、すぐに由貴から視線を外し、前を向いてしまう。
タイミングよく教師が教室に入ってきたので、由貴も慌てて前を向く。
――不覚にも。吹雪の笑顔を、可愛いと思ってしまった。

＊＊＊

本日の補習を無事に終え、由貴と吹雪は揃って教室を出た。
頭に詰め込んだものを吐き出すように、同時に深いため息が出た。
由貴が吹雪を見ると、吹雪も由貴を見上げていた。目が合ってしまい、照れ臭くなって由貴がはにかむと、吹雪も当たり前のように笑い返してくれた。
なんとも和やかな雰囲気である。今までいがみあっていたのが嘘

のようだ。
少しだけ、吹雪と歩み寄れた気になった。補習も悪くない。
由貴は軽くなった気分のまま、静かな廊下を歩き出す。吹雪も並んでついてきた。

「さああて。お楽しみの図書室に寄って帰るかな！」

凝り固まった身体を伸ばしながら、由貴は言う。補習などはオマケに過ぎない。メインの時間はこれからなのだ。由貴は心躍らせ、自然ニマニマとする。

「……図書室に行くの？」

「だって俺には雪音さんが待ってるもん。雪音さんと会うことだけが今日の楽しみだったんだよ！　これって恋だよなー。俺ってば雪音さんに恋しちゃってるんだな、うん」

ピタリ、と吹雪が立ち止まった。
そのことに数歩歩いてから気付いた由貴は、吹雪を振り返る。

「どうしたの周防さん？」

由貴の目に映る吹雪は……もう笑っていなかった。
見慣れてしまった、泣きそうな顔に戻っている。

「ばか」

吹雪は言い捨て、踵を返して反対方向へと走って行ってしまった。
廊下を折れて、姿が見えなくなる。由貴はただそれを呆然と、見ていた。

「……俺またやっちゃった？」

一体何がまずかったのかわからない。由貴は立ち尽くし、呟いた。暫くの間、途方に暮れていた。しかしこんな場所に棒立ちになっていても何ができるわけでもない。

今日はもう帰ろうかな、と意気消沈してしまい由貴はとぼとぼと歩き出した。

「相沢君」

背後から自分の名前を呼ばれ、由貴は反射的に振り向いた。

「んげ」

顔が歪んだ。額に青筋が走る。

由貴の背後にいつのまにか立っていた人物は、由貴がこの世で最も顔を合わせたくない人物だった。夏休みの人気のない廊下で、よりによって最悪な人物と遭遇した自分の不運を呪う。

「偶然だね」

「ぐっ偶然ですね、俺もう帰るとこなんすよ。じゃあさよならっ」

「それはよかった。僕も部活が終わって丁度今から帰るところなんだよ。一緒に校門まで行こう」

「あ、いえそれは」

「いいだろう？」

「……はい」

有無を言わさぬ圧倒感。由貴は仕方なく、頷いた。

校内に人気はあまりないが、部活やプールに来ている生徒や補習組などもいる筈だ。誰かに目撃される可能性はあったが、由貴の噂などもう学園内で知らない人間などいないのだ。

ああもういいや。好きに噂してくれ、と半ばヤケクソ気味に由貴は歩き出した。

隣に並び歩き始めた人物、生徒会長、若槻八雲の横顔を由貴は少し見上げる形でこっそりと見遣る。

この人は変態認定されても、全く動じてないのだろうか。

学園中に由貴を部室で押し倒したことがひろまった時も、表情一つ変えなかったと風の噂で聞いた。由貴とは思考の構造が全く違うようだ。

陶器の西洋人形のように滑らかな肌と整った顔立ち、襟足が長めのさらさらとした髪の毛。身長は高く、程よく筋肉がついているのが制服の上からでも分かる。どこを見ても全く欠点がない。隣を歩くのが女生徒ならば、間違いなくぽわわ、と魅入ってしまうだろう。

「陸上部に戻ってくる気はないのかい？　相沢君は足も速かったし、レギュラーは確実だったのに」

八雲が由貴に優しげに顔を向け、問いかけてくる。

「す、すいませんどうしても戻れないのっぴきならない理由がありまして」

お前が理由だ！　と心の中で突っ込む。

「もしかして僕がしたことを、気にしているのかな」
八雲の言葉に、由貴は思考を読まれたのかとドキリとしたが、なんとか表情は平静を保った。
「いえ。陸上部をやめたのは一身上の都合でして」
「中途半端な気持ちで君を押し倒したわけじゃない」
「ひゃっはー！　中途半端な気持ちでいいです！」
堪らなくなって、喚き散らす。それを見てか、八雲が苦笑を浮かべた。
「そんなに僕の気持ちは重いかな」
「……八雲先輩、この際はっきり言います」
由貴は立ち止まって、八雲と向き合った。視線が絡み合う。
ドキドキドキ。なんでこの人は、こんなにも吸い込まれそうな瞳なんだ。
ごくりと由貴の喉が鳴る。
決意を固め、肺いっぱいに息を吸い込んだ。
「俺、そういう趣味じゃないんではっきり言って迷わ――ひぃっ！」
言い放ちかけた言葉は半ばで、途切れてしまう。
八雲がずんずんと歩み寄ってきて、がばりと由貴を抱き締めてきたのだ。

「な、なあぁあっぬわあぇ」

由貴の口からは意味不明の言葉しか出てこない。

至近距離で八雲が由貴の瞳をのぞきこんできた。くすり、と妖艶な笑みを浮かべた。

「君の気持ちを手に入れたいんだ」

八雲の吐息が首筋を撫でる。ぞくぞくぞくと、背筋に走る戦慄。

こうして迫られるのは二度目ながらも、八雲の魔力でもあるような眼差しに、由貴は全く抵抗が出来ないまま震えることしかできない。

細長い指が、由貴の顎をぐいと掴み。顔を上向きにされた。

「ゃ……い、嫌……」

「なんていう色気なんだ。相沢君、君はすごく可愛いよ」

由貴の目の端に涙が浮かぶ。

滲んだ視界に映る八雲の顔が、唇が、近付いてくる……！

「君を僕のモノにする」

八雲が程近く、唇が触れるか触れないかの距離で、紡いだ。

「！？」

そして由貴は八雲に強引に腕を掴まれ、近くの教室へと引きずり込まれた。

第二話　目指せ学園アイドル！？

吹雪は廊下の曲がり角を折れたところで、立ち尽くしていた。
深く、深く溜め息が漏れる。

「わたし……やっぱり頑張れない」

呟き、視線が落ちた。
由貴が見ているのは雪音の姿だけ。自分など全く眼中にないことを、改めて思い知らされてしまった。
こんな状態で、一体どうすれば恋心を抱かせられる？
学園のアイドルになってやる！　と意気揚々に演劇部にまで入ったのに。
演劇部はこの時間も夏のコンクールに向けて、猛練習中のはずだ。補習の後に自分も顔を出すつもりだったけれど。
もう、どんなに自分が頑張ったって無駄だ。空回っている。
演劇部なんて行かずに、帰ってしまおう、と思う。吹雪は視線を落としたまま、その場から足を一歩前に出して。

「どういうつもりですか！？」

――どこからか、悲鳴に近い大声が耳に届いた。それが由貴のものだと、すぐにわかる。
吹雪は足を止め、振り返る。すぐに曲がってきた廊下を戻り、由貴の姿を捜した。
廊下にその姿はない。しかし、歩いて来たところを早足で戻っていくと、一室の前で、由貴の声がまたも届く。

「やめ、……！　八雲先輩！」

閉じられたドアの向こうで、切羽詰った様子が伝わってくる。八雲先輩とは、由貴に付きまとっている二年生の先輩のはずだ。学園に転校してきてから何度もその現場を目撃しているので、存在は知っている。

由貴につきまとって煩わしい存在だという認識はあったものの、まさかの、実力行使に出たのか。吹雪の顔が青ざめる。

吹雪は由貴の貞操の危機を感じ取り、すぐにドアを開け放とうと……

躊躇した。

何も考えずに開けようとしたけれど……吹雪の脳内にくりひろげられる妄想世界。

『八雲先輩、なんの用なんですか』

『全く相沢君は……わかっているくせに』

『やっ、先輩、何を……！？』

『ふふ、あんまり可愛らしいから君を虐めたくなってしまってね』

『やめてくださ……っ』

『嫌だ嫌だって言っててても、身体は嫌がっていないように見えるよ？』

『先輩の意地悪……』

舞い散る薔薇。

吹雪は更に青ざめ、ぶんぶんと強く首を振る。由貴が実はそんな

に嫌がっていないとしたら。実はそういう趣味もあったとしたら。
そんな場面に遭遇してしまったら、自分は二度と立ち直れなくなる。
動けなくなってしまった。
泣きそうになる。視界がぼんやりと滲んだ。
心がどこまでも弱っている。なんて自分は情けないのだろう。

「なんで俺に拘るんですか！？」

大きく張り上げた声が耳に届き、吹雪は顔を上げる。咄嗟、ドアに身を寄せ、聞き耳を立てていた。

「ちょ……！　それ以上近付いたら蹴りますよ！？」

「つれないな相沢君。どうしても君の心は僕のモノにならないということか」

「当たり前だぁああ！！　俺は女の子が好きなんだ！！　そんな趣味はない！！」

由貴の絶叫に、吹雪はほっと胸を撫で下ろす。
よかった、由貴はノーマルな人間だった。今だったら踏み込める。
吹雪は今度こそ扉を開こうと――

「大人しくしたまえ。相沢君の中にある、『純潔』さえ手に入れば君に興味はない」

――純潔。確かに八雲は『純潔』と言った。
吹雪は再び、動きが止まる。頭の中が真っ白になった。

「ひぃぃ！　お、おおおお俺のことを穢すつもりですかアンタ！」

由貴が勘違いをしているのか、パニック気味に八雲に言葉を向けているのが聞こえる。

「君は何も知らないんだね」

八雲の呆れたような声。

「何もって、何を知れって言うんですか！」

「周防吹雪さんにもう全て聞いていると思っていたよ。そうか、彼女は君に何も話してないんだね」

「周防さんは俺に純潔を返せとしか……って、純潔ってもしかして、周防さんの言ってた？」

「『純潔』は『雪姫』となる周防吹雪が持っているものだ」

「雪姫……？」

やはりだ。吹雪の喉がごくり、と鳴った。

彼は、事情を知っている。若槻八雲はただ相沢由貴につきまとう生徒会長という存在ではない。

こちら側の存在――ということは。

吹雪はハッと顔を上げる。

「気持ちが手に入らないのなら、手段を変えるまでだ」

「え！？　八雲せんぱ――」

二人の深刻な会話が、途切れた。直後、ガタガタッと椅子が倒れた大きな音。
吹雪はもう何も考えず、扉を開け放った。
「……っ！」
教室内で繰り広げられていた光景に、吹雪は息を呑んだ。
八雲の背中がまず目に飛び込んできた。そして、八雲に押し倒され、乗りかかられている由貴の姿。
「ぐっ……が」
由貴が呻き、手を伸ばしている。震える指先が宙をかく。
吹雪の眼前で、八雲が由貴の首を絞めていた。
驚愕の光景に、立ち尽くしていたのは一瞬。
吹雪は頭に血が昇り、無我夢中で八雲に向かっていた。
「駄目ぇぇぇ！！」
叫び、八雲に全力で体当たりをかました。
不意打ちに八雲の身体が簡単に飛ばされる。全身でぶつかっていったので、吹雪も一緒になって床に倒れた。すぐに立ち上がり、身構える。視界の端、凄まじい力で首を締め上げられていたらしい由貴が、咳き込んでいるのが見えた。
「……やぁ、はじめましてと言えばいいのかな、吹雪さん。今いいところなんだ、邪魔しないでくれるかな」
ゆらりと身を起こし、八雲が今までの出来事などなかったかのように爽やかな笑顔で言い放つ。斜めに差し込む陽の光が、この状況

で笑っていられる八雲の顔を不気味に照らしていた。

「若槻八雲。一体誰の差し金？」

吹雪と八雲が対峙する。視線が交錯した。深みのある、吸い込まれそうな瞳が自分をじっと見つめている。

「聞かずとも分かるだろう？」

無表情になって告げてくる八雲に、吹雪は怯んだ。

鼓動が早鐘を打ち、自然に瞳が潤み、唇を噛む。

「そういうことだ。君がこの世界に来る前から、もう手回しはしてあったんだ」

「でも、でも！　相沢由貴を殺さないって約束だった！」

「そんな話、僕は全く聞いていない。これは僕の独断で行ったことだしね。転校して来てから、君の様子をずっと見てきた。その上で、君が全く目的を遂行できないことを悟ったんだよ。君は全くの、役立たずだとね」

吹雪はぐっと詰まる。確かに、自分は何一つ出来ていない。

魅力的になることも、由貴の心を手に入れることも。キスも。そして、今この状況で、立ち向かう力でさえ何一つ。

それでも、

「大人しくそこで見ていたまえ」

八雲が背中を向ける。いまだ苦しそうに身体を折り曲げて荒い息

を吐き出す由貴へと、近付いて行く。

「私は諦めてなんかいない！！」

全力で叫んだ。

八雲が吹雪の叫びに、振り返ってきた、時にはもう遅い。

間近に迫った八雲を睨み上げ、腰を低くし、跳躍。

八雲の驚愕した表情を垣間見、

「ほげぅあっ」

――必殺の右ストレートが、頬に鮮やかにクリーンヒットした。

八雲が見事なまでに吹き飛んでいく。倒れる机と椅子の数々。

そして吹雪は椅子をひっつかみ、倒れている八雲へと思い切り振り下ろした。

がすっ、という悲惨な音がした。

「はぁ、はぁ……」

吹雪は荒い息を吐き出し、翳していた椅子を捨てる。そして、床に仰向けに倒れている八雲を見下ろす。横に鈍器のように椅子が転がっている……まるで殺人現場のような有様になっている。少し暴走しすぎた感もあるが、白目を剥いている八雲は意識を失っただけで済んだようだ。

八雲が起き上がってこないことを確認してから、吹雪は身体を折り曲げて未だ咽ている由貴へと、歩み寄っていく。

「大丈夫？」

苦しそうな由貴の背中をさすってやる。

「周防、さん」

由貴が目の端に涙を浮かべ、吹雪を仰いでくる。

「早くここを出よう。いつまた起きるかわからない」

吹雪が深刻に言い放つと、由貴も頷き、立ち上がった。

教室を出て二人は走り、玄関で靴に履き替えて、校門までたどりついた。ずっと無言で切迫した表情だったが、そこでやっと一息つく。

「ここまで来ればもう大丈夫だよな」

由貴が後ろを振り返っている。殺されかけたことがよっぽど恐怖だったのか、未だ顔が青ざめている。

「なんなんだよ一体。変態先輩かと思ってたら殺人先輩かよ！　てか周防さんなんであの場にいたの？　俺的には大助かりだったけど」

「それは……」

由貴に問われ、吹雪は言いよどむ。

「なんか俺の命の危機に、いつも周防さんがいるよな。二回も死にそうなとこを助けてもらっちゃったな……ありがとう、周防さん」

あまり深く考えることが苦手なのか、由貴が呑気な笑顔を向けてきた。

吹雪は締め付けられるような感覚に、胸の前でぎゅっと拳を握る。

「――から」

「え？」

「……なんでもない」

熱くなった頬に気付かれる前に、由貴へと背中を向けた。

「それにしてもさ、八雲先輩『純潔』を手に入れるとか、周防さんがこの世界の人間じゃないみたいに言ってたよな。完全に電波な先輩だ」

由貴が軽い調子で言ってきたが、吹雪にとっては笑い事では済まされなかった。深刻な表情に戻り、俯く。

「周防さん？」

「……あなたはまた命を狙われることがあるかもしれない」

吹雪は由貴を振り返り、真剣に告げた。

ここまで事情が知れてしまっては、仕方ない。何も話さないでいるつもりだったのに。命が狙われたとあっては、由貴自身にも危機感を抱いてもらう必要がある。

「また？　なんで俺が」

「それはあなたが『純潔』を持っているから」

「『純潔』ってなんなんだ？　雪姫になる？　一体周防さんは何者、

」

ふぅ、と吹雪は息を吐いた。

「私は人間じゃない」

吹雪は由貴を真っ直ぐに見つめ、真剣な表情のままで言い放つ。

由貴が唖然とした顔で、完全に絶句している。

「じゃあわたし、行くから」

呆然と立ち尽くしている由貴へと向け、言って。背中を向け、駆け出した。

吹雪は眉根を寄せ、俯きながら走る。胸がざわざわとざわめいているようで、落ち着かない。

……別れ際に見た由貴の表情が脳裏によぎり、振り払う。

知られたくなかった、というのが本音だったのかもしれない。

それでも、まだ夏は終わらない。

どんなに状況が絶望的でも。どんなに無駄な足掻きだったとしても。

自分のやるべきことは、一つしかない。

先ほど由貴に向けた言葉は、届かなくても確かにこの胸の中にある。

『絶対に助けてみせるから』

「……学園アイドルになって、メロメロにしてやる」

一人呟き、瞳に光を宿し、吹雪の足は自然と演劇部へと向いていた。

＊＊＊

この世界に来た時に、視界に飛び込んできたのは命を奪われる寸前の、相沢由貴の姿だった。

由貴に体当たりして、突き刺さる寸前の氷柱を避けた。

そしてその手を取って、駆けて、駆けて。

身体が無茶苦茶に重くて、ボロボロで。一人になって別館の裏手で荒い息を吐き出していた。

そこに現れたのは、雪音だった。

『吹雪、どうやってこの世界に？　あの結界を抜けてきたって言うの？』

雪音が目を丸くし、心配げに駆け寄ってきた。

『お姉ちゃ、ん……相沢由貴を殺す決定が下されたのは知って、いる。でも、何もしないで待っているだけなんて嫌なの』

『吹雪、でも』

『わたし、自分で相沢由貴の心を奪う。そしてキスをすれば純潔を取り戻せるのでしょう？　だから、お願い。もう少し待って』

厳しい眼差しの雪音が、吹雪を捉える。

『あなたの決意はよくわかったわ。でもタイムリミットはこのひと夏の間だけ。それ以上は待てない』

吹雪も神妙な面持ちで、頷く。

『分かってる。このひと夏の間に、わたしは相沢由貴から純潔を取り戻す』

『……もし、出来なかったら？』

『――その時は、わたしがこの手で相沢由貴を殺すわ』

雪音を真っ直ぐに見つめ、告げた。

それが、この世界にやって来た時に、雪音と交わした約束。

第三話　理想のカタチ？

雨は降っていないものの、太陽の姿は見えない。雲が空一面を覆い、今にも泣き出しそうである。

泉田春香は夏休みに入った学園に向かう道中、そんな灰色の空を見上げて少なからずがっかりした。

今夜は自宅近くの河川敷で花火大会が開催される。もしこのまま降り出してしまえば、花火大会は中止となってしまうだろう。特に誰かと行く約束をしていたわけではなかったけど、遠くからでも花火を見るのが毎年の楽しみだったのだ。

「降りませんように」

小声でこっそりと、空に向かってお願いをしてみる。

誰かに聞かれていたら恥ずかしいな、と春香は周囲に視線を巡らせてみた。

そこで、騒がしい一団が視界に飛び込んできた。

本校舎の玄関前だ。春香は立ち止まってその一団に注目してしまう。

「なんで八雲先輩、つきまとってくるの？」

「吹雪さんこそなんで、相沢君とぴったり寄り添うように一緒に歩いているんだい」

「わ、わたしはっ護えぃ……じゃなくて、補習で帰りが一緒になっただけ！」

「へえ。ならば補習も終わったことだし、もうこの先用はないだろ

う？　さぁ君は部活なり、帰るなりしたまえ」

「八雲先輩こそ、全然ここにいる意味が分からない！　また何かする気なんでしょう！？」

「いやぁ心外だな、もう暴力はふるわないさ。やっぱり強引なのはスマートじゃないし、路線を元に戻したんだよ」

「路線を元にって……全然諦めてないじゃない！」

「相沢君に対する僕の猛る気持ちを、君に止められるのかい？　君はそこまで相沢君のことを」

「そ、そそそんなんじゃないけど！」

「吹雪さん、君も素直じゃないな。僕と相沢君「ぎゅわああおおおえぇ！」」

肩を抱かれて悲鳴を上げている由貴。

八雲はどこまでもにこやかスマイルだ。

「――の関係に嫉妬しているんだろう？」

遠目にも分かるほど、吹雪は真っ赤で涙目になっている。

「違うもん！」

なんだかすごい現場に遭遇してしまった。おそらく補習上がりの吹雪と由貴の二人。それにちょっかいをかけているらしい八雲の姿だ。

由貴の引っ張り合いを初めてしまった八雲と吹雪の様子を見て、春香はこっそりと呟いてみる。

「もてもてですな」

当の由貴は死んだ魚のような、生気を奪われた眼になっている。

奇妙な三角関係状態に、現実逃避をしているらしい。

「……さて、なかなか有意義な一時だったが、僕はこれから用事があることだし失礼するよ」

「早くどっか行け！　うー！」

「近いうちに相沢君の心を手に入れるのは、僕だということを覚えておきたまえ」

楽しげに目を細めて吹雪へと向けて言った後、あっさりと由貴を解放し、八雲が去っていく。

力強く引っ張っていた吹雪の方へ、由貴が傾いている。寄り添うような状態になって、吹雪がすごい勢いで由貴を突き飛ばした。吹き飛ぶ由貴。引っ張り合いなら出来るけれど、二人きりでの接触は恥じらいを感じるらしい。

ぱんぱんと手を払って誤魔化すように視線を泳がしていた吹雪が、ぽつりと佇む春香の存在に気付いた。

「春香！　どうしたの？　部活？」

先ほどまでの険しい表情が緩み、明るい顔で駆け寄ってきた。

春香も笑顔を見せ、ペットボトルが大量に入ったビニール袋を持ち上げて見せる。

「うん。コンクール近いから、差し入れ」

由貴もよろよろと立ち上がって、疲れきった表情ながら近付いてくる。

「そういえば春香ちゃんも周防さんと同じで演劇部だっけ」

「うん」

……やっぱり、私に対する認識なんてそんなものだろうな。笑顔を向けつつ、春香は内心で溜め息を吐く。

星乃城学園に入学して、演劇部に入ったのはなんとなく流されてのことだった。一学年上の時雨からの『君は学園のアイドルになれる！』というしつこい勧誘に負けた。実際演劇に興味はなかったし、部活にもほとんど参加したことがないのが現状。こうやってたまに差し入れを買ってくるぐらいの幽霊部員なのだ。

流されて、適当で、受動的。それが自分の生き方なのだと思う。

「わたしも今から行くところなんだ。一緒に行こう」

吹雪が目を輝かせ、ハキハキと言い放ってくる。春香と違って吹雪は演劇部の活動に熱心なようだ。

「うんうん」

ニコニコしたまま頷いて。歩き出した吹雪の後へとついていく。

吹雪が突然に振り返ってきた。春香ではなく、春香の背後に立っていた由貴を振り返ったらしい。瞳に厳しさがこもっている。

「八雲先輩に気をつけていて」

「……分かってるよ」

なんだか二人にしか分からない空気を感じた春香は、間に立っているのが申し訳なくなって、早足に吹雪の隣に並ぶ。

由貴もどうやら一緒の方向へと向かってきているようだった。

グラウンドで練習をしている運動部の様子を横目でぼんやりと眺めながら、歩いて行く。と。

ふ、と手が軽くなった。

「……にゃ？」

瞬間何が起こったのか把握できない。いつの間にか横を歩いていた由貴を見上げた。

由貴が春香の持っていたビニール袋を、持ってくれていた。

「重そうだったからさ。別館まで行くなら俺、持つよ」

全くなんの含みもなく。当たり前のように、由貴が言う。

「ありがとうにゃー」

笑顔がぎこちなくなってしまったかもしれない。わざとふざけた感じで言ってしまった。

右横を歩く由貴と、左横を歩く吹雪。二人をこっそりと盗み見て。

……なんとなく、ちくり、と胸の苦しみを覚えた。

別館の前で由貴と別れを告げ、春香は吹雪と一緒に演劇部の備品置き場へと足を運んだ。

本来、演劇部の活動場所は体育館の舞台上なのだが、時雨は大体

の時間を備品置き場で過ごしている。脚本、演出、舞台監督、大道具、小道具、衣装などほぼ全部の裏方を一人で担当しているので裏方作業をしている時間が多いのだ。
他の演劇部員は体育館の方でセリフ合わせや発声練習などをしているらしいが、実を言うと春香は体育館の稽古の方には一度も参加したことがない。

「せんぱーい、差し入れ持って来ましたよー」

春香は声をかけ、扉を開ける。
予想通り、時雨が一人でいた。

「おお悪いな春香。そこに置いておいて」

縫い物に夢中になっている時雨を横目に、吹雪と共に備品室内へと踏み込む。

「あれ、先輩それって、浴衣？」

ちくちくと針を通している生地は、どうやら浴衣だ。夏らしい刺繍の施された鮮やかな模様の浴衣に、心がときめく。

「そうだ。今日は花火大会だからな」

「先輩行くんですか？」

「本当は行く予定はなかったんだけどな。吹雪が花火を見たことがないとほざきおったから、連れて行くことにしたんだ」

「吹雪ちゃん、花火見たことないんだ？　外国って花火って盛んじ

ゃないのかな」
春香が吹雪へと向き直って聞いてみると、吹雪は恥ずかしそうに頬を染めている。
「全く。花火を知らんなど、人生損している。吹雪は経験不足すぎるから演技に深みがないのだ。いいものをたくさん見て、多くの感情を経験するのがよい演技に繋がるのだ。ちょうどいい、春香も行くぞ」
「うんっ、一緒に行こう春香！」
吹雪が嬉しそうに時雨に同意している。春香に断る理由などない。嬉しくなって、満面の笑みが浮かぶ。
「えへへーみんなで花火、花火ですな！」
一気に気持ちが浮上した。備品の机の上に、ペットボトルが大量に入ったビニール袋を置く。それから吹雪の両手を取って、一緒にぴょんぴょんと跳ねた。
そんなことをしていたら、時雨にばさり、と浴衣を羽織らされた。
「ほわ？　時雨先輩？」
「うん。この色は春香が似合うな。仕立て直すからじっとしてて」
「え、え？　でも先輩、これ先輩が着てくんじゃ？」
「演劇部の衣装だし、まだ他にもあるから。可愛い女の子を輝かすのが、アタシの生きがいだしな」

頬に熱を帯びる。じっと立ち尽くしたまま、糸を口で挟んで作業をしている時雨の様子を見下ろした。

「私は可愛くなんてないですよ……浅い人間なんです。たまに自分が嫌になるくらい」

「なんで？　春香、すごく可愛いのに」

無邪気に吹雪が聞いてきた。春香は苦笑を向ける。

「だって絶対ほしいものとか、絶対叶えたいことって咄嗟に思いつかないんだ。将来何になりたいとかそういう夢もないし。何もかもが流されるままの、つまらない人間」

「そんなことはないだろ」

時雨が春香から離れて、横着にも机の上に腰かけ、足を組んだ。置いてあったパックジュースを飲んだ後、軽い調子で春香に言葉を向けた。

「自分を誤魔化しているだけ。春香は貪欲な人間だよ」

「えええっ貪欲ってなんかひどい言われよう」

春香は眉を八の字に下げるが、時雨はニヤリとするばかりだ。

「よーく考えてみな。今自分の心を占めている気持ち。認めたらきっと自分のこと、好きになれるから」

時雨に言われて、春香は考え込んでしまった。
今自分の心を占めている気持ち。
――本当はわかっている。けど、認めたくなかったりする。

「さ、仕立ては後でやっておくから。体育館の方に行くぞ。今は稽古、稽古」

腕時計を確認した時雨が、一つ伸びをして机から降りる。
吹雪の元へと歩み寄り、前髪に、花の形のヘアピンをつけてやった。

「吹雪は浴衣が着れないって言うから、もっと可愛くなれるように、おまじないだ」

時雨の言葉に、吹雪が真っ赤になって前髪を触っている。仕草がとても可愛らしい。春香は思わず微笑がこぼれる。
そうして三人で備品室を出たところで。
見覚えのない女生徒が五人、春香と吹雪と時雨の前に立ちはだかった。春香は面くらって立ち止まる。

「周防吹雪ってどいつ？」

一人の女子が口を開く。どうやらリーダー格の女子。並ぶ面々を見て、一年の生徒ではないと気付く。春香や時雨が何か言葉を発する前に、吹雪が一歩前に出た。

「わたし」

先ほどの和やかな雰囲気とは打って変わり、吹雪は刺々しい空気を纏っている。

「へぇ、あなたが周防吹雪、ね。……ちょっと一緒に来てほしいの」
リーダー女子の言葉に吹雪が頷き、一歩前へと出る。
その手首を、咄嗟に春香は掴んでいた。
「吹雪ちゃん、私も――」
「大丈夫だよ、春香。これはわたしの問題。ちょっと行ってくるから待ってて」
吹雪ににこり、と笑顔を向けられて。春香は手を離す。
ぞろぞろと女子の集団に囲まれて、別館を出て行く吹雪たち。
春香はそれを見守ることしかできず……ぎゅっと拳を握った。
「あいつら、見覚えがあるな。八雲のファンクラブの女子たちだ」
時雨が面白くなさそうに舌打ちをしている。
「なんで吹雪ちゃんを……もしかして、ゆきたんのことで反感を買ってるんじゃ」
八雲と吹雪は現在対立している立場だ。夏休み中と言えど、二人が言い合いしている現場を目撃した生徒も多数いるだろう。実際春香も先ほど目にしている。八雲のファンクラブの女子たちが面白く思わないことも容易に想像がつく。
「ゆきたんのこと？」
時雨が問いかけてくる。

「えっと、吹雪ちゃんは、ゆきたんに……」

言いかけて、ためらい、口が止まる。

――あの女の子たちと、自分は何が違うというのか。

結局、自分からは何もできずにこうやって一人でもやもやしている。いつも同じことを繰り返している。

「行くぞ」

「え……？」

春香は俯いてしまっていた顔を上げた。横で時雨がニヤっと笑っている。

「助けたいんだろ？　立ち止まって考えるより、まず行動だ」

時雨が言い放ち、背中を向けて走り出す。

そうだ。いつだって自分は内部でうじうじと考えているばかりで。

突っ走れる人間になりたいのだ。吹雪のように、時雨のように。

そして私は、そんな風に突っ走れる人間が、どうしようもなく大好きなんだ。

第三話　理想のカタチ？

吹雪の前に、ぞろり、と立ち並ぶ剣呑な表情の女子たち。
高校生の女の子たちといえど、結構な迫力を感じる。しかし吹雪は負けていない。一人一人をじっくりと睨み付ける。

「なんの用事？」

低く言い放った。
リーダーっぽい女子が一歩前へと出てきた。腕を組んで、背の低い吹雪を圧倒するように見下ろしてくる。
別館の裏手。ただでさえ本日は曇って鈍色の空の下、木々が茂って影になっているこの場は更に薄暗く、空気が淀んでいるようだ。

「周防吹雪、相沢由貴君から、手を引きなさいよ」

「……あなたたちに、なんの関係があるって言うの？」

無表情の女子たちを前に、吹雪はぎゅっと拳を握って立ち尽くす。

「私たちも噂を聞いたの。二人の間をうろちょろしてるんでしょ？邪魔なのよ。八雲様にたてつくなんて」

「……八雲先輩の指示ってわけね」

なんとなくは、想像がついていた。
八雲は相沢由貴から『純潔』を奪おうとしている。おそらく自分の姉、雪音の指示で。その事実を知った直後、すぐに姉に問い詰めてはみたものの、のらりくらりとかわされてしまった。補習期間の

間も、しつこく八雲は由貴をつけ狙っている。心を奪えなければ、きっとまた命を狙ってくる。ことごとく邪魔している吹雪が、疎ましく感じたのだろう。

「それにしたって、卑怯なやり方。虫唾が走る」

吹雪は吐き捨てた。

八雲は真っ向から攻めてくるのではなく、遠回りに諦めろと言っている。吹雪の一番嫌いなやり方だ。

「何を偉そうに！　あんたは大人しく引っ込んでなさいよ！」

感情的になった女子が、吹雪の二の腕を強く掴んできた。

凄まじい締め付けに、吹雪の表情が痛みで歪む。

「少し痛めつければ、思い知るでしょ」

女子の一人が言ってくる。今から行われるであろうことは、想像がついた。吹雪はそれでも眼差しに力を込めて、ただ睨むことしかできない。

この人間たちは、わたしたちの世界とは無関係だ。八雲に利用されているだけ。だから、手出しはできない。

腕を掴んでいた女子が、強く突き飛ばしてきた。

「うっ……く」

吹雪の身体が別館の壁へと衝突する。背中に走る痛みに、ずるり、とその場に座り込む。

その間にも女子たちが、じりじりと距離を詰めてくる。吹雪はその様子をただ見上げて――

「やめろ！」

怒声がその場に響いた。

吹雪は目を見張る。

女子たちの向こう、怒りに肩を震わせて立っていた人物は――相沢由貴だった。

女子たちもその声にびくりと反応して、揃って振り返っている。

「一人に対して大勢なんて卑怯だろ！　なんでこんなこと……」

女子たちは舌打ちし、その場からあっさりと走り去っていった。

由貴が吹雪の元へと駆け寄ってくる。

「大丈夫か、周防さん」

手を差し出されて、ようやく状況を把握する。その手を取らず、ぎらりと由貴を睨みあげた。

「あなたはなんでここにいるの？」

「なんでって……偶然図書室の窓から、周防さんが女子たちに囲まれてるのが見えちゃったんだよ。放っておけないだろ」

「余計なお世話。わたしは、こんなことなんとも思わない」

スカートについた土埃を払いながら、立ち上がる。

どうせ今日も図書室でデレデレと雪音を見ていたくせに。吹雪は言葉にせずに、視線で棘を放つ。

「悪かったな、余計なこととして」

由貴が不機嫌そうに呟いた。

それを耳にして。吹雪はハッと気付く。

まただ。また、自分は、可愛くないことを言ってしまっている。

気付いた時には、もう遅い。由貴はもう背中を向けていた。

今更お礼も言えない。吹雪は、ただ由貴の去っていく背中を見つめる。

「また失敗してる……」

自虐的に呟いた。その時由貴が振り返ってきたので、聞こえてしまったのかと慌てた。

「それでもさ。それでも、俺にとって、周防さんは命の恩人だから。余計なことでも、ピンチの時は助ける」

息を呑んだ。

由貴はそれだけ早口に言うと、去っていく。別館の角を曲がって、姿が見えなくなる。しばらくの間、吹雪の頭は真っ白で。

いつの間にか自分の目の前に立っていた春香と時雨の姿に、ようやく気付いた。

「良かった吹雪ちゃん！　探したんだよ！　変なこと言われてない？　痛いことされてない？」

心配げにのぞきこんでくる春香の顔を見て、正気に返る。

「だ、だだだだ、大丈夫なの、れす」

「……吹雪ちゃん？　顔、真っ赤だよ？」

時雨も吹雪のそばに立っていた。爪を噛んで、何やら穏やかではない表情を浮かべていた。

「八雲ファンクラブの女子、か。うちの可愛い後輩に手出しするなら、ちょっとこっちも本気を出させてもらうかな」

「なんか怖いですよ時雨先輩」

「前々から大きな顔をしているあやつとその取り巻きは気に食わなかったんだ。いい機会だ。フハハ見ていろ八雲！　この時雨を敵にまわした恐ろしさを思い知るがいい！」

「八雲先輩に何か恨みが……？」

高笑いをしている時雨には、春香の疑問は届いていないらしい。時雨が高笑いをやめて、吹雪の頭を無造作にくしゃり、と撫でてきた。

「だから吹雪。安心して戦え」

心強い時雨の言葉に、吹雪はこくりと頷く。なんだか、すごく頑張れる気がした。

「わたし、諦めない。頑張る」

「吹雪ちゃん……」

横に立っていた春香が呟き、

「あああ、もう！」

唐突にだった。感情的に喚いて、頭をぐしゃぐしゃと激しくかきむしった。

「は、春香？」

「どうした春香」

いきなりの行動を見せた春香に、時雨と共に驚くしかない。その吹雪の顔を見てか、春香は笑んだ。

「あは、私……うん、誤魔化してた。ずっと心では引っかかってたのに言えなくて」

「誤魔化すって、何を？」

「私ね、吹雪ちゃんが大好き。だからちゃんと心から話し合えるようになりたいの」

顔が熱くなっていくのを感じた。しかしきちんと春香の言葉を受け止めて、頷く。

時雨は一歩下がって、立っている。事態を静観するつもりらしかった。

「最初にまず謝らないといけない。私、最初に吹雪ちゃんに話しかけたのはすごく不純な動機からだった。ごめんなさい」

春香が深く頭を下げてきた。吹雪には一体なんのことだか、理解

ができない。

「吹雪ちゃんと友達になりたいって思って話しかけたんじゃないの。気になって、探ってやろうって気だった」

「え、何が気になったの？」

「転校初日に、ゆきた――相沢由貴君に、告白したこと」

「あ……」

その話題を出されると、とてつもなく恥ずかしさが込み上げてくる。別に告白をしたつもりはなかったのだ。でも周囲の認識では告白ということになっているらしい。最も封印したい思い出となってしまった。

「私、吹雪ちゃんに嫉妬したの。それで探りを入れるつもりだった」

「嫉妬って……」

「自分でも自分の感情をずっと誤魔化してた。はっきりさせたくなかった。はっきりさせるのは怖いから。傷つくかもしれないから。けどね、私吹雪ちゃんのこと本当に大好きになったから、本当の友達になりたいって思ったから言わなきゃ」

春香が一度息を吸い込む。真剣に、真摯に、吹雪を見つめてきた。

「私、ゆきたんのことが好きなの。多分、入学式で会った時からずっと」

木々の立ち並ぶこの場は、蝉の鳴き声がうるさい。それでもはっきりと吹雪の耳に届いた。目を見張り、春香を見つめる。

「自分のこと、少しでも好きになりたいから。時雨先輩の言うとおり私貪欲だから。もう誤魔化さない。逃げない。ゆきたんを好きな気持ち、譲らない」

「あ、ちが……！　わたしはそういうわけじゃ」

吹雪はあわあわと否定をしようとするが、言葉にならない。

「吹雪ちゃん、私、負けないから」

春香が手を差し出してきた。どこまでも真剣な表情で。

自分も、それに答えなくてはならない。だから。

その手をおずおずと、握り返した。

第三話　理想のカタチ？

稲葉時雨の日常は忙しい。
夏の高校生演劇コンクールに向けて最終調整中であり、夏休みに入ったことでますます部活動が一日の大半を占めるようになった。寝ても覚めても部活部活部活。演劇演劇演劇。
花火大会とか、三角関係とか、八雲ファンクラブに構っている場合ではない。
時雨は自分自身の頬を張って、気合を入れなおす。

「さてさて諸君！　いよいよコンクールまで二週間となった。あとはもう芝居の完成度を高めるのみだ。頑張るぞ！　死ぬ気で演劇に臨め！」

体育館の舞台上で時雨は声を張る。館内に高らかに響く声。
部員たちは「はい！」と気持ちのよい返事で返してくれた。
その中には吹雪の姿もある。時雨のつけてやったヘアピンが可愛らしく髪の毛を飾っている。
真っ直ぐないい子だ、うん。時雨は吹雪を見て心を和ませる。
春香の姿もある。春香はあまり部活動自体には積極的ではないのだが、大会が近いということもあり手伝いやジュースの差し入れなどを持って毎日足を運んできてくれている。
かわいい後輩だ、うん。時雨は春香を見て……しかし、こっそりとため息を漏らす。
吹雪と春香。それに八雲まで。恋愛問題に口出しする気はないけれど、誰かが傷つくのを見たくはない。かといって、無視もできない性格で。

「今はこんなことで悩んでいる場合じゃないのだが……」

ぶつぶつ呟いていると、当人の春香が時雨の目の前にいた。

「時雨先輩、そんなとこに突っ立っていると練習始められませんよ」

「あ、ああ。すまんすまん」

気付けば役者たちが配置についている。時雨は慌てて舞台袖へと移動した。

春香も時雨の横に並び、立つ。

演劇経験の浅い吹雪はというと、音響の手伝いで反対側の舞台袖にいる。

春香の眼差しは舞台上ではなく、その吹雪へと向けられていた。時雨はその眼差しに気付いて、春香の肩に手をおく。

はっと春香は時雨を仰ぎ、気まずそうに眉を下げ、俯いた。

「時雨先輩、私、吹雪ちゃんを傷つけちゃったのかも」

先ほど、春香が吹雪にライバル宣言をした。そのことを今更に気にしてしまっているのだろう。春香らしい悩み方に、時雨は肩をすくめた。

「後悔だけはするなよ、春香」

「え？」

春香が顔を上げる。

時雨は舞台を見つめたまま、言葉を紡ぐ。

「自分の気持ちをまっすぐぶつけていけ。きっと吹雪もそんな春香

と一緒にいることを望んでいるから」

「……すごいなぁ、時雨先輩は」

春香が溜め息交じりに言う。

「恋愛問題だって、簡単に解決しちゃいそうです」

苦笑が漏れた。時雨は春香の頭に手を置いて髪の毛をくしゃくしゃと撫でる。

「なにするんですか！　セットしなおしたのにめちゃくちゃじゃないですかーもう」

「春香は可愛いな。アタシだって、けっこう悩んでるんだぞ」

「時雨先輩が？　あ、そういえば時雨先輩ってお付き合いしてる人がいるんでしたっけ」

「……まぁね」

言葉が濁ってしまう。

「実は今日の花火大会も誘おうと思ってる」

「わあ。時雨先輩の彼氏さんも一緒に行くんですね！　なんかワクワクしちゃうなぁ」

時雨はニヤリと応じつつ――後でその彼氏に連絡せねば、と自分の心の中のスケジュール帳に書き込む。

きっといい顔はしない。少し憂鬱な気分になる。
ちょっと前に花火大会に誘ってくれたのを、忙しいの一言で却下したのは時雨なのだから。
吹雪を連れて行くという使命感に燃えて、ついつい忘れていたのだ。一度断ったのに他の子と一緒に行くということを報告しないわけにもいくまい。
自分の問題も更に上乗せされてしまった。
腕を組んで舞台を見つめながら、これ以上はややこしい問題になりませんように、と切に願うのだった。

＊＊＊

夕暮れ時の河川敷。空は雲に覆われて、空気は湿り気を帯びている。しかし雨が降らない限りは、花火大会は滞りなく行われるだろう。河川敷周辺は見学に来た人々で混雑していた。露店もいくつか出店しているので、ちょっとしたお祭りの賑わいになっていた。
そんな活気付いた場で。
部活を終えた時雨は浴衣を着付けてやった春香を連れて、その場にやってきた。吹雪は一度家に帰って姉に報告しなければならないとのことで、後から合流する予定だ。

「あ、いたいた」

想像以上に溢れかえっている人ゴミにうんざりしながら、きょろきょろと視線を巡らせていると、大分レジャーシートで埋め尽くされている中で彼氏の姿を発見した。連絡したら、友達と一緒に先に行って、場所取りをしておいてくれると言ってくれたのだ。彼氏の横に、友達らしき姿もある。

時雨と春香は人の波をかきわけながら、近付いて行く。

「陽太！」

時雨は自分の彼氏の名前を呼んだ。当の陽太が、声に気付いて振り返ってくる。隣の友達も。

「え……もしかして、時雨先輩の彼氏って」

春香が隣で呆然と呟き、立ち尽くしている。陽太の友達が立ち上がって元気良く手を振ってきた。

「おーい！　って、あれ？　春香ちゃん？　なんで？」

陽太の友達も、春香を見てびっくりした顔だ。

「陽太君が、時雨先輩の彼氏だったんですか……」

まだ驚きの表情のままの春香。一体何にそんなに驚いているのか、と時雨は首を捻るばかりだ。

「うん。アタシの彼氏は陽太だよ。そんでそっちの友達は……」

陽太の友人とは初対面である。高校に入ってからの友達とは聞いていたけれど。

「どうも、始めまして！　相沢由貴って言います！」

わざわざ駆け寄ってきたその人物が、頭を下げて、言った。

「相沢、由貴……？　どっかで聞き覚えがあるな――はぅあっ！？」

「時雨先輩のバカ……」

春香が呟き、時雨は頭を抱えた。

なんてことだ。思い切り事態をややこしくしてしまった。春香の想い人がまさか自分の彼氏の友人だったとは。しかも、この場には吹雪も来る予定だ。

「ど、どどどどうする時雨……今更他人のフリは出来ないし。てゆうかお前、相沢、帰れ！」

「えっ」

「お前は今日のこの場に、要らん！　消えろ！」

「ひどっ」

由貴に向けてずびし、と指を向けて言い放つ。

「初対面の人間に消えろって……」

半泣き面の由貴を見かねてか、春香が間に立ってきた。

「まぁまぁ時雨先輩。みんな一緒のが楽しいですよ。ね、ゆきたん」

春香が微笑んで言うと、由貴は頬を染めて頭をかいている。単純な人間らしい。時雨は内心、簡単な由貴に感動すら覚えた。だって、友達であり、自分の彼氏でもある……

「……」

陽太はレジャーシートに座って、無言で本を読んでいる。春香と時雨の登場に、軽く会釈した程度だ。全然簡単じゃない。

「浴衣かわいいっすなー夏ですなー」

春香を見ている由貴の頭から、花がぽわぽわと出ている。春香は嬉しそうにくるん、と一回りして見せている。可愛らしい二人だ。

春香の頭も結ってやったし、ピンクの浴衣を着付けてきた。自分が見繕ったのだから、春香に似合うのは間違いない。鼻高々になる。自分は地味目な藍色の浴衣を着てきた。髪型もそのままだ。春香を可愛くすることに熱くなりすぎて、時間がなくなってしまったのだ。

時雨は陽太の隣に腰を下ろした。

「場所取りありがとう」

言うと、本を読んでいた陽太が顔を上げる。

「俺は暇人だから問題ないよ」

ぐさ。言葉に棘を感じる。一度断っておきながら、花火大会に誘ってしかも今度は大人数になっている。陽太の腹立ちは無理もないのだろう。あまり責めてこないのが逆に心苦しかった。

「俺飲み物買ってくるよ。春香ちゃんも一緒に行かない？」

由貴が立ち上がったので、座りかけていた春香も慌てて立ち上がる。

「あ、うん。時雨先輩は何がいい？」
「アタシウーロン茶」
「俺ポカリ」
陽太が便乗して言う。由貴と春香は了承して露店の方へと歩いていった。人ゴミに紛れてその姿はすぐに見えなくなってしまった。
気を使ってくれたのだろうか。
実際誘いを断ってしまったことを後悔していた。けれど毎日の忙殺で、ゆっくりと話す時間もなくて。
久々の陽太との、二人きり。トキメく心もあるけど、気まずさも空気に混じっている。
「……まだはじまらないかね」
「七時から。まだ十分くらいある」
「雨降らないといいけどな」
「そうだな」
陽太はあっさりと返して、再び本に目を落とす。
「あのさ……怒ってる？」
「なんで？　別に」
「いつもより三割増し冷たい気がする」

「そんなことないよ。いつも通り」

否定されてしまうと何も言えなくなる。確かに陽太はいつでもクールなのだ。

時雨がしょぼん、とうな垂れていると。

目の前に、何かを差し出された。

あまりに眼前だったので何かわからなかったが、焦点が合ってからようやくそれが何かわかる。

――お守りだった。

「二人きりの間に渡しておくよ。もうすぐ地区大会だろ？　県大会、全国大会まで進めるように」

時雨は驚きつつもお守りを受け取る。

「これ、用意してくれたのか？」

陽太は頬をぽりぽりとかいた。

「近くの神社だからご利益は当てにならないかもしれないけど。俺の気持ちは入ってるから」

「だって……頑張ったらもっと忙しくなるぞ？　県大会とか全国まで行くんだったらますます会う時間なんてなくなっちゃうし。今までだって何度も陽太の誘い断ってきているのに」

「俺は頑張ってる時雨を見てるのが……えーと、好きだし？」

視線を泳がせつつ、陽太が言った。

胸が熱くなった。ずるい。このタイミングで。泣いちゃうじゃな

いか。
お守りを大事に鞄の中にしまう。それから時雨は膝立ちになって、陽太の頭をぎゅっと胸に抱えた。髪の毛をくしゃくしゃと撫でる。
「ちょっ時雨！　こんなとこでそれはっ」
「陽太が見てくれるから、アタシ頑張れる。大好き」
赤くなってアワアワしている陽太にますます愛しさが込み上げる。時雨は陽太の柔らかい髪の毛にキスをした。
「決めた。会ってる間はいちゃいちゃしまくる」
「人目をちょっとは気にしてくれ！」
確かに周りのレジャーシートに座っている人々からの視線が痛い。時雨は苦笑い、陽太を解放してやる。
「いちゃいちゃするの嫌いか？」
聞くと陽太は耳まで真っ赤になりながら、息を吐いた。
「べつに……嫌じゃない」
そう言って。時雨の手をそっと握ってくれた。
どおんっ
花火が打ちあがる。
二人は花火を見上げた。
近くで打ちあがった大きい花火に周りからも歓声があがる。
花火大会の、開幕である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3088s/

雪のお姫様

2011年12月9日23時54分発行